

第2章 近畿における土器・陶磁器の様相

はじめに

近畿には、近世を代表する遺跡が多く点在する。摂津（大阪府）の大坂城・大坂城下町跡・堺環濠都市遺跡、山城（京都府）の京都などの大都市をはじめ、播磨（兵庫県）の明石城武家屋敷跡・姫路城跡などの城下町でも活発に調査している。ただ、広域に調査する例は少ない。

そうした状況ではあるが近畿の41遺跡を統一した方法により計測分析をおこない、土器・陶磁器の産地別組成と用途別組成から、各遺跡の特徴を明らかにした結果、これらを4つに分類することができ、それらをⅠ都市型遺跡、Ⅱ城下町型遺跡、Ⅲ在郷町型遺跡、Ⅳ集落型遺跡と名付けた。

本章では、4類型の土器・陶磁器の様相を記述するが、その際には、各類型の代表的な遺跡として、Ⅰでは大坂城跡・大坂城下町跡、Ⅱでは明石城武家屋敷跡、Ⅲでは伊丹郷町遺跡、Ⅳでは中百舌鳥遺跡を各節の冒頭で分析し、これと共通性を示す遺跡を比較する形で、それぞれの類型ごとの特色を明確にする。最後の第5節においてはこれら4類型を比較し、近畿全体の土器・陶磁器の様相を論じることとしたい。

なお、対象時期は「近世」と称している。「近世」の始まりについては諸説がある。土器・陶磁器で考えた場合、「桃山陶器」の出現、連房式登窯の導入による技術的变化などがみられる16世紀後期からを対象とするのが妥当である。それ以降の江戸時代も含む遺跡・遺構を対象とする場合、16世紀末～17世紀前期の間を初現とする遺跡が多いため、この時期からとした。

第1節 近畿の都市型遺跡における土器・陶磁器の様相

1 大坂城跡（第1・2図－1）

近畿の代表遺跡として、まず取り上げたいのは大阪市域に所在する大坂城跡・大坂城下町跡である。これら遺跡では近世を通じて良好な遺構が認められ、ここでは16世紀末～17世紀前期、17世紀後期～18世紀前期、18世紀後期～19世紀前期にかけて産地別組成に大きな変化がみられる。したがって、これを画期とみて三期にわけて土器・陶磁器の様相を明らかにする。

大坂の都市としての営みは戦国時代の石山本願寺寺内町に始まり、豊臣期には政権の中心地となり、元和元年（1615）の大坂夏の陣以降、江戸時代を通して商業都市として栄えた。発掘調査は主郭部及び三の丸までの範囲を「大坂城跡」、惣構え部及び船場町や道修町などを「大坂城下町跡」とわけている。しかし、出土する土器・陶磁器の様相は大坂城跡と大坂城下町跡とでは産地・用途別組成に大きな差異がないため、研究報告等では両遺跡を「大坂城跡」の様相として記述されている。したがって、筆者もその踏襲を考慮した（以後、大坂城跡と略す）。なお、遺構の年代観については筆者が遺構の検出状況・遺物組成から考究した。

① 16世紀末～17世紀中期

16世紀末～17世紀前期の良好な遺構として OJ92-18SK505 があり、これは元和元年（1615）の大坂夏の陣に伴う廃棄土坑である。産地別組成を比率の高い順に列記すると土師質土器 31%、中国製磁器 22%、肥前陶器 16%、瀬戸美濃陶器 15%、軟質施釉陶器 6%、備前焼 4%、丹波焼 2%、朝鮮王朝陶磁器 2.6%、瓦質土器 1%、信楽焼 0.4%と続く（第3図）。用途別組成は食膳具 86%、調理具 7%、調度具 6%、貯蔵具 1%で、食膳具が遺物の半数以上を占める（第4図）。

産地別組成で高い比率を示した土師質土器の器種は、皿・羽釜・焙烙・焼塩壺・甕・火入れである。このうち皿の数量が圧倒的に多く、成形は手づくねが主体である。胎土の色調や細部の成形方法から数種に分類できるが、それらは広域に分布しておらず、したがって在地産と考えられる。

次いで比率が高いのは中国製磁器である。また、同じ貿易磁器に朝鮮王朝陶磁器があり、これらの主な器種は碗・皿である。貿易磁器は同時期の道修町や伏見町などの町屋跡、三の丸内の武家屋敷跡においては、量産品も含むが明末清初の景德鎮窯の青花碗・皿・鉢や漳州窯系の赤絵の盤などの高級食膳具も多く出土し、その割合は高級品 3 に対して量産品 2 と前者が多い。

中国製磁器に続くのは肥前陶器で、主な器種は碗・皿などの食膳具である。これらの品質は粗雑な作りの無文の量産品が多いが、「桃山陶器」に分類される絵唐津の懐石具も含まれる。その割合は 3 : 2 と量産品が多いが高級品も一定量出土する。大坂城跡では、大坂夏の陣に伴う火災層の下面に慶長 3 年（1598）の三の丸築造に伴う盛土が各所で検出されるが、この盛土及びそれに伴う遺構では肥前陶器はほとんど出土しない。しかし盛土の上

層にあたる夏の陣（火災）層及び遺構では一気に出土量が増加する。OJ92-18SK505 の産地別組成にもその状況が現れている。

肥前陶器に次ぐ比率を示すのが瀬戸美濃陶器である。品質は量産品の皿や天目碗が目立つが、黄瀬戸・志野焼・織部焼は懐石具や茶器などの「桃山陶器」とよばれる高級品も一定量出土する。

土師質土器、施釉陶器・磁器に比べると低いが、これらに続くのが焼締陶器である。その比率は備前焼4%、丹波焼2%、信楽焼0.4%で、すべて合わせても10%に満たない。主な器種は播鉢・甕が出土する。

本遺構では中国製磁器、肥前陶器、瀬戸美濃陶器などの施釉陶器・磁器は、産地別組成でも高い比率を示し、合わせると53%になり、材質でわけた場合には施釉陶器・磁器を中心とする組成となる。これらの主な器種は食膳具であり、用途別組成においてもこれら施釉陶器・磁器が食膳具で86%と高い比率を示す。

OJ92-18SK505 の前段階である慶長3年(1598)の三の丸築造に伴う遺構とする OJ92-18SK500 の産地別組成では(第3図)、土師質土器45%、中国製磁器23%、備前焼16%、瀬戸美濃陶器15%、肥前陶器3%と続き、用途別組成は食膳具50%、調理具30%、貯蔵具18%であった(第4図)。OJ92-18SK505 と比較すると土師質土器、中国製磁器、瀬戸美濃陶器とも比率値に大きな違いはない。その一方、備前焼は減少し、肥前陶器は5倍以上の比率値に変化している。このことから、施釉陶器・磁器の増加は肥前陶器の食膳具が急増したことが原因であると推定される。これは中世の土師質土器を主とする食膳具組成から、施釉陶器・磁器を主体とする組成に大きく変化したことを意味すると考えられ、ひいては施釉陶器・磁器の食膳具が日用器として定着した現れであるとみなすことができる。

この後、肥前陶器の急増傾向は続く。たとえば、1620年代前期と推定される AZ87-5 SX201 で土師質土器・瓦質土器を省く産地別組成では(第3図)、肥前陶器48%、中国製磁器18%、備前焼13%、丹波焼10%、瀬戸美濃陶器9%が続く。このなかで肥前陶器の比率は OJ92-18SK505 では中国製磁器や瀬戸美濃陶器と近い値である。しかし、AZ87-5 SX201 に至るとそれらを大きく上回る比率を示し、17世紀前期には肥前陶器が陶磁器の主体へと変化する。また、焼締陶器も前代で高い比率を示していた備前焼は減少し、丹波焼と拮抗する状況に変わる。

1630~40年代と考えられる OJ92-18SK330 は廃棄土坑である。産地別組成を見ても

ると(第3図)、土師質土器 38.6%、肥前陶器 34%、肥前磁器 7%、丹波焼 5%、中国製磁器 5%、備前焼 3.2%、瀬戸美濃陶器 2.7%、東南アジア陶器 3%と続く。用途別組成は食膳具 72%、調理具 15%、貯蔵具 8%、調度具 5%で、食膳具の比率が高い組成である(第4図)。

土師質土器は依然として高い比率を示すが、肥前陶器との比率差はごく僅かとなる。これらは在地産で、器種は皿が多く、これに羽釜・焙烙などの土鍋類が続くのは前代と同様である。肥前陶器はAZ87-5SX201より比率を上げ、土師質土器と近接する。主な器種は前代と変わりなく、食膳具組成において46.5%と高い比率を示す(第5図)。また、この時期から肥前磁器が出現し、主な器種は食膳具の碗・皿で、その組成において12%と肥前陶器に次ぐ比率を示す。その一方で、中国製磁器5%、瀬戸美濃陶器3%と前代より比率を下げる。これらの主な器種は前代と同様に食膳具である。したがって、施釉陶器・磁器の食膳具は中世から17世紀初頭までの中国製磁器・瀬戸美濃陶器を主とする組成から、肥前陶器・肥前磁器が中心となる。

肥前陶器・肥前磁器の増加はその後も継続する。1640～50年代と考えられるOJ92-33.6層では施釉陶器・磁器の産地別組成は肥前陶器51%、肥前磁器26%、中国製磁器14%、瀬戸美濃陶器9%で(第3図)、肥前陶器の比率が依然として高いが、SK330段階と比べると陶器と磁器の比率幅が狭くなる。1650～1660年代と考えられるOJ92-15.5層では肥前陶器51%、肥前磁器24%、中国製磁器16%、瀬戸美濃陶器9%で、OJ92-33.6層の組成が継続する。これら施釉陶器・磁器の主な器種は碗・皿・鉢などの食膳具である。

このように17世紀前期～中期には施釉陶器・磁器の食膳具は陶器と磁器に近い数値を示す組成に変わる。但し、大坂城跡の同時期の遺構では中国製磁器が肥前陶器の比率を上回るか近い数値を示す、または肥前磁器が肥前陶器を大きく上回るなどの遺構も認められる。このような組成の相異は検出した地点の性格によるものと考えられる。

施釉陶器・磁器の様相が変化する中で焼締陶器も変わる。SK330では丹波焼が急増する。主な器種は播鉢・甕で、調理具組成では丹波焼播鉢15%、備前焼播鉢4%と本産地が圧倒的に高い比率を示す(第6図)。備前焼は、中世から17世紀初頭まで焼締陶器の主体であった。しかし、本時期には丹波焼に主体が移行し、それまでの焼締陶器の組成に変化がみられる。この時期には備前焼のような広域流通品を受容するのではなく、遺跡近郊の丹波焼を主に受容し始めたと考えられる。

② 17 世紀後期～18 世紀中期

17 世紀後期～18 世紀前期の遺構として広島藩蔵屋敷跡 SK2018 が挙げられる。産地別組成をみると土師質土器 46%、肥前磁器 32%、肥前陶器 12%、瀬戸美濃陶器 3.2%、京焼系陶器 3.1%、丹波焼 3%、堺・明石焼 2%、備前焼 1.8%、軟質施釉陶器 0.08%、中国製磁器 0.02%と続く（第 3 図）。用途別組成については食膳具 52%、調度具 28%、調理具 17%、貯蔵具 3%と依然として食膳具が高い比率を示す（第 4 図）。

この時期でも産地別組成で土師質土器の比率が高いが、これは皿・焙烙などの破損が著しかったためである。個体数では次に比率が高い肥前磁器が 50%近い比率を示す。また、土師質土器は成形や胎土の特徴をみると在地産が多いと思われる。

肥前磁器は産地別組成で主体となるが、その傾向は広島藩蔵屋敷跡 SK2018 の前段階とする 17 世紀後期の旧中央体育館 SK799 から現れる。主な器種は前代と同様に食膳具である。計測分析できなかつたため数値として示せないが、旧中央体育館 SK799 の食膳具組成は S K 2018 に類似し肥前磁器 55%、肥前陶器 24%、土師質土器 18%と、肥前磁器の比率が高い。しかし、旧中央体育館 SK799 の調度具組成では肥前磁器はごく僅かであったのに対して、S K 2018 では瓶類や香炉などの増加により調度具組成が比率を上げており、この時期には食膳具以外の器種も含めて大量に受容していることがわかる。

肥前磁器に次ぐ肥前陶器は、前代より比率が下降するが器種組成に大きな変化はなく、このことから食膳具の主体は肥前磁器に移行するが、引き続き肥前陶器も一定量受容すると考えられる。

肥前磁器・肥前陶器以外に、瀬戸美濃陶器は伝世品と考えられる「桃山陶器」の懐石具や茶器、御深井の皿や鬚水入れなどが僅かに出土する。この時期から新たに出現するのが京焼系陶器である。産地別組成で示すように比率は低い。主な器種は丸碗である。

焼締陶器は依然として丹波焼の比率が高く、主な器種は播鉢・甕である。しかし、播鉢は調理具組成をみると、この時期から出現する堺・明石焼が 12.4%と比率が高い（第 6 図）。同時期の旧中央体育館 S K 705 では丹波焼播鉢が 80%を示しており、本遺跡では前代に引き続き丹波焼播鉢が中心だったと考えられる。甕も貯蔵具組成で丹波焼 75%と比率は高く（第 7 図）、したがって、本遺跡では播鉢・甕の主な産地は、前代と変わりなく丹波焼と考えられる。

18 世紀前期の資料として享保 9 年（1724）の妙知焼の火災関係遺構がある。旧中央体育館 SK764 は妙知焼による火災後の廃棄土坑であり、産地別組成は肥前磁器 65%、土師

質土器 14%、肥前陶器 13%、堺・明石焼 4%、丹波焼 3%、軟質施釉陶器 1%と続く（第3図）。用途別組成は食膳具 73%、調理具 16%、貯蔵具 4%、調度具 7%と食膳具が依然として高い（第4図）。

肥前磁器は産地別組成において広島藩蔵屋敷跡 SK2018 段階より比率を上げる。主な器種は前代と変わりなく食膳具の碗・皿で、碗の器形は丸碗・半球碗・筒型碗である。品質は、前期では景德鎮窯の食膳具や「桃山陶器」に分類できる志野焼や絵唐津などの懐石具や茶器などの嗜好品が中心であったが、本時期には有田町で生産された柿右衛門様式などの色絵皿・鉢、染付の碗・皿など肥前磁器の食膳具が高級品の主体となる。このような高級品が出土するが「くらわんか手」などの量産品も多くあり、その比率は高級品 40%に対して量産品が 60%と多い。他の地点でも量産品の「くらわんか手」の碗・皿が大量に出土し、産地別組成で肥前磁器の比率が上昇するのは、この量産品の食膳具の増加によると考えられる。

焼締陶器は堺・明石焼、丹波焼が出土するが、前者の比率が高い。同時期とする広島藩蔵屋敷跡 SK2003 では産地別組成で丹波焼の方が出土量は多い。堺・明石焼の主な器種は播鉢で、調理具組成では堺・明石焼が 35%を示す（第6図）。本器種は前代では丹波焼が多く出土したが、SK764 の出土状況から堺・明石焼播鉢に移行すると考えられる。丹波焼の主な器種は播鉢・甕で、播鉢は先に述べた通りだが、甕は貯蔵具組成で依然として丹波焼の比率が高く、これについては他産地からの影響はなかった。

このように大坂城跡では、17 世紀後期～18 世紀前期に肥前磁器が増加し、それまでの土師質土器を主とする組成から肥前磁器が中心となる組成に変化し、ここに画期が認められる。

また、同じ妙知焼の資料として住友銅吹所跡の享保 9 年（1724）の妙知焼に伴う焼土層がある。本銅吹所は、住友家二代である泉屋理兵衛が寛永 13 年（1636）に開設した。その後の元禄 3 年（1690）に同敷地に本店・居宅も併設され、明治 9 年（1876）まで世界でも最大級の精錬所を誇っていた。製造された銅は国内ではもちろんのこと、オランダ東インド会社を通して海外に輸出されていた。

本遺跡からは精錬に係る遺構を検出したが、住友家で使用したであろう陶磁器が多量に出土し、このうちで妙知焼に遭った遺物は実年代資料として重要視されている。

1 今井典子「住友長堀銅吹所略史」『住友銅吹所跡発掘調査報告』財団法人 大阪市文化財協会 1998 年

その施釉陶器・磁器の産地別組成は中国製磁器 58%、肥前磁器 37%、京焼系陶器 3%、その他国産陶器 1.8%と続く(第9図)。用途別組成は食膳具 94%、貯蔵具 1%、調度具 5%と食膳具が高い比率である(第10図)。

産地別組成で比率が高いのは中国製磁器である。次の肥前磁器の比率値を大きく上回るため、これが主体であることがわかる。主な器種は食膳具で、装飾は明末清初の青花を含むが、大半は清朝磁器の色絵で最新の製品である。碗の器形は蓋付碗・端反碗、皿は丸皿・輪花皿、鉢など豊富で、これらの大半は組物である。

中国製磁器に続くのは肥前磁器で、中国製磁器と比率値に大差はあるが、次の京焼系陶器とも差異がみられる。器種は食膳具の碗・皿・鉢で、装飾は色絵が多く、その中で金襴手が目立った。京焼系陶器は色絵の碗、古清水の手鉢・箱物、鏽絵の鉢など調度具が多く出土する。

住友銅吹所跡では中国製磁器、肥前磁器は当時の最新・最高級の製品を主に受容しており、特に清朝の色絵磁器が多量に出土する例は他に長崎の出島関係の遺跡にあるのみで、これらが特別なルートで持ち込まれた可能性が高い。17世紀後期～18世紀前期は住友家が銅精錬から銅輸出や海外商品の輸入を開始し、銅山の事業に進出するなどの事業を拡大した時期である²。それに関係するのにか元禄10年(1697)にオランダ商館長が銅吹所を参観したことが、商館長日記に記されている。このような特別な入手手段を持ち、さらに経済的な発展により最高級品の食膳具を購入できたと思われる。

住友銅吹所跡に類似する例は、同じ大坂城跡の OJ92-18 地点である。本地点は道修町一丁目に所在する。S K412 は宝永5年(1708)の道修町大火か、あるいは享保9年(1724)の妙知焼の火災資料と考えられる。計測分析をおこなっていないため数値は示せないが、中国製磁器・ベトナム磁器の食膳具が多量に出土し、国産では肥前磁器・京焼系陶器の食膳具もみられた。中国製磁器は明末清初の伝世品も多いが清朝磁器も含まれ、これらの多くは組物である。本地点の周辺でも S K412 のように多量ではないものの、貿易磁器や肥前磁器の高級品が数点出土する地点があり、道修町周辺では上質の陶磁器を多く受容できる町人が居住していたと考えられる。

18世紀中期とする NW04-1 SK603 は廃棄土坑である。産地別組成をみると土師質土器 33%、肥前磁器 23%、京焼系陶器 15%、丹波焼 10%、堺・明石焼 7%、肥前陶器 6%

² 1と同じ。

と続く（第3図）。用途別組成については食膳具 41%、調理具 31%、調度具 25%、貯蔵具 3%であり（第4図）、調理具の割合が上がり食膳具と競合する。

土師質土器は前代と変わりなく高い比率だが、それは皿・焙烙の破損が著しいためで、個体数値だと肥前磁器が 50%以上の比率を示す。主な器種は皿・焙烙であるが、火鉢・焜炉類の比率が前代より僅かに上がる。肥前磁器の主な器種は食膳具の碗・皿で、その組成では 49%と依然として比率が高い（第5図）。

これらに続くのが京焼系陶器であり、17 世紀後期～18 世紀前期より比率が上がる。主な器種は碗・土瓶・土鍋である。京焼系陶器碗は、広島藩蔵屋敷跡 SK2018 では僅か 5%であったが、本遺構は 18%と比率を上げる（第5図）。器形は丸碗・筒型碗・半筒碗・小杉碗と多種となり、また陶器碗組成では肥前陶器碗より比率を上回る。さらに、土瓶・土鍋などの調理具もこの時期から急増し、調理具が用途別組成において前代より比率を上げるのは、京焼系陶器の煮沸具の増加によることも要因の一つと考えられる。

焼締陶器は丹波焼、信楽焼、堺・明石焼で、これらでは丹波焼が前期と変わらず高い比率を示す。前代では播鉢・甕の主産地であったが、調理具組成をみると堺・明石焼播鉢 25%、丹波焼播鉢 1.8%で（第6図）、播鉢の主体が堺・明石焼に移行する。甕は、本遺構では丹波焼 63%と比率は高いが、信楽焼 35%が出現し、新たな競争相手が現れる（第7図）。このように他産地に移行するとともに徳利がこの時期から急増する。徳利は前代ではごく少量であったが、本遺構の調理具組成によると丹波焼徳利は 25%と土師質焙烙に次いで高く、本時期に一気に増加することがわかる（第6図）。徳利は体部に屋号を釘彫りされた「貧乏徳利」と呼ばれるものである。

③ 18 世紀後期～19 世紀中期

18 世紀後期～19 世紀前期にかけても産地・用途別組成で大きく変動する。この時期の遺構である NW04-1 SK01 の産地別組成は、京焼系陶器 46%、肥前磁器 21%、土師質土器 9%、丹波焼 9%、軟質施釉陶器 3.2%、堺・明石焼 3%、瀬戸美濃陶器 2.8%、瀬戸美濃磁器 2%と続く（第3図）。用途別組成は食膳具 27%、調理具 53%、調度具 17%、貯蔵具 3%にわかれる（第4図）。

京焼系陶器は、前代まで比率が高かった土師質土器、肥前磁器に変わって産地別組成で高い比率を示す。この要因は京焼系陶器の器種が多様化するためである。前代に主製品であった食膳具の碗、調理具の土瓶・土鍋、調度具の灯火具が急増し、特に調理具は著しい。

調理具組成で京焼系陶器土瓶 58%、京焼系陶器土鍋 17%と、これらで 75%を占める。用途別組成において調理具の比率の上昇は煮沸具の増加によることが明らかとなった。これは前代まで土器・陶磁器の中心が肥前磁器の食膳具であったが、本時期にはその様相が変化し京焼系陶器の煮沸具が大量に出土し、陶磁器の受容に変化がみられる。したがって、ここに画期があると考えられる。

肥前磁器は前代と変わりなく食膳具が主体である。その組成では 58%と依然として高い比率を示す。また、地点によっては突出して高級品が出土する例もある。京焼系陶器の増加によって産地別組成での比率は下がるが、実質的には大きな影響はなかったと考えられる。土師質土器の主な器種は火鉢や焜炉類であり、調度具組成で高い比率を示すが、前代で多く出土した皿・焙烙は逆に下向する。

この土師質土器の火鉢・焜炉類の増加は、先に述べた京焼系陶器の煮沸具と関係する。京焼系陶器煮沸具の底径と焜炉・火鉢の口径、器高との間に適応関係が認められ、煮沸具は製作過程で双方がセットすることを想定していたと考えられている³。確かに絵図や文献資料では竈や囲炉裏で使用されるより火鉢や焜炉などで煮沸される例が多い。火鉢や焜炉は竈や囲炉裏のように広い場所がなくとも使用できる。とくに都市部の中小規模の屋敷では大きな竈を構築することは難しく、江戸中期から後期の大都市では、人口増加によって小規模な長屋が増えたため、小規模な竈に対応する陶器の土瓶・土鍋が普及したと考えられる。これには酒の庶民化、料理のバリエーションの増加などが料理本の出版の増大から窺える。

したがって、京焼系陶器の煮沸具や土師質土器の焜炉類の増加は、人口増加による生活具の変化と食文化の発展によるものと言えるだろう。

焼締陶器では丹波焼の比率が高く、主な器種は徳利・播鉢・甕である。前代に引き続き徳利が多く、調理具組成において備前焼 0.4%、丹波焼 14%と丹波焼徳利が高い比率を示す(第 6 図)。調理具組成によると播鉢は堺・明石焼 5%、丹波焼 0.15%となり、丹波焼播鉢は僅かである(第 6 図)。甕は貯蔵具組成において丹波焼 30%、信楽焼 32%と信楽焼甕がやや高い比率を示す。しかし、丹波焼甕が高い地点もあり、本遺跡における甕の様相は一産地が独占するのではなく、多産地が競合していた(第 7 図)。このことから、丹波焼は徳利以外の器種は主産地となるには至らない。

³ 日下正剛「問題提起・徳島」『第 5 回 四国城下町研究会 四国と周辺の土器Ⅱ - 火鉢・焜炉類にみる流通と生活形態 -』発表要旨・資料集 四国城下町研究会 2003 年

この他に、産地別組成での比率は低いが萩焼、瀬戸美濃磁器、京焼系磁器などが新たに出現する。これらの主な器種は共通して食膳具である。

NW04-SD04 は 19 世紀中期の大型の廃棄土坑である。産地別組成は肥前磁器 37.4%、京焼系陶器 37%、瀬戸美濃陶器 7%、土師質土器 5.2%、丹波焼 4.4%、肥前陶器 4%、瀬戸美濃磁器 1.6%、堺・明石焼 1.2、信楽焼 0.8%、ヨーロッパ磁器 0.4%と続く（第 3 図）。用途別組成は食膳具 50%、調理具 34%、貯蔵具 8%、調度具 8%にわかれる（第 4 図）。

肥前磁器の主な器種は食膳具である。その組成において 75%と高い比率を示しており、この様相は前代から継続している（第 5 図）。京焼系陶器は前代と比べると大きな変化はなく、土瓶・土鍋類などが主に出土する（第 6 図）。土師質土器は前代より比率を下げる。本遺構では土師質土器皿の破損が激しかった。そのため産地別組成に数値が高く現れ、さらにその影響が用途別組成で食膳具の数値の上昇に現れたが、個体数値は肥前磁器より低い。主な器種は火鉢・焜炉などの暖房具・厨房具で、調度具組成において高い比率を示す（第 8 図）。

焼締陶器では丹波焼が多く出土する（第 3 図）。主な器種は「貧乏徳利」で、この組成は前代から引き続く（第 6 図）。焼締陶器の主製品である甕・播鉢の様相は、貯蔵具組成では丹波焼甕 59%、信楽焼甕 10%と丹波焼が高いが、NW04 地点では他の産地が多い遺構もあり、前代に引き続き多産地が拮抗する（第 7 図）。播鉢は堺・明石焼が前代同様に市場を独占している。

大坂城跡の土器・陶磁器の出土状況を通覧すると 3 つの画期となる時期があったことが明らかとなる。第 1 の画期は肥前陶器の出現・急増により産地・用途別組成に変化が見られる 16 世紀末～17 世紀前期、第 2 の画期は肥前磁器の増加により土師質土器に変わって産地別組成で高い比率を示す 17 世紀後期～18 世紀前期、第 3 の画期は産地別組成で京焼系陶器が肥前磁器を抜いて高い比率となり、その影響によって用途別組成で食膳具を抜いて調理具が主体となる 18 世紀後期～19 世紀前期であった。

次に、大坂城跡以外の遺跡の土器・陶磁器組成を比較検討するが、それにあたって大坂城跡の画期とみた 3 期ごとに検討を加える。

2 堺環濠都市遺跡（第 2 図-11）

大坂城跡と類似する土器・陶磁器の様相を呈するのが堺環濠都市遺跡である。南北朝期

からの港湾都市で、15世紀後期からは国際貿易都市として発展し、織豊期には信長・秀吉の支配下のもとで、千利休や古田織部などの茶人を生み出し、経済・文化的に繁栄する。しかしながら天正14年（1586）には秀吉によって外堀が埋め戻され、それに追い討ちをかけるように元和元年（1615）の大坂夏の陣によって町は焼失する。その後、江戸時代は徳川氏の支配のもと再興されて商業都市として栄えた。

発掘調査は断続的に実施されているが、調査条件により近世を層位的に行われている例は少ない。しかし、SKT959 地点⁴は中世～幕末まで層位的に調査されており、ここから出土した遺物を計測分析できたため、この地点の遺構を主に検討し、さらに大坂城跡の様相と比較し、本遺構の特徴を明らかにしたい。

① 16世紀末～17世紀前期

まず、16世紀末～17世紀前期の遺構として014井戸が挙げられる。産地別組成は、土師質土器41%、中国製磁器18%、肥前陶器17.1%、備前焼7%、上野・高取焼6%、瓦質土器4%、丹波焼4%、瀬戸美濃陶器0.7%と続く（第43図）。用途別組成は食膳具49%、調度具20%、調理具19%、貯蔵具12%にわかれる（第44図）。

産地別組成で最も高い比率を示すのは土師質土器で、主な器種は皿・焙烙・甕である。なかでも皿と焙烙は各用途別組成で高い比率を示す。また、皿の用途は食膳具・調度具にわけられ、食膳具組成で36%と比率が高く（第46図）、調度具組成でもこれが100%を示し（第49図）、各用途別組成で皿が多く出土していた。

土師質土器に続くのは中国製磁器である。主な器種は食膳具の碗・皿・小坏で、景德鎮窯が多いが、大皿については漳州窯系も目立つ。食膳具組成によると土師質土器36%、中国製磁器35%、肥前陶器26%、瀬戸美濃陶器3%と、土師質土器と比率値に差異がみられない。また、遺跡の中央を南北に通る紀州・熊野街道沿いには、蔵と考えられる磚列建物をもつ屋敷が建ち並んでいたことが発掘調査によって明らかであり⁵、その蔵跡内から多量の中国製磁器の青花・青磁の食膳具が出土する。したがって、遺跡内でも高級陶磁器を多く受容する地点があることもわかった。

⁴ SKT959の資料をもとにその変遷を述べるが、堺環濠都市遺跡は中世・近世を代表する大都市であり、一部の資料でその都市の様相を示すのは難しいと考えられるが、他の調査地点から検出した遺物組成を検討しても高級品の受容差はあれど、それ以外の差異は大差ないと考えられる。

⁵ 永井正浩「堺環濠都市遺跡（SKT19地点）SF001出土資料について - 天正十三（1585）年銘木簡同伴資料の評価 -」『関西近世考古学研究』IX 関西近世考古学研究会 2001年

土師質土器に続くのは肥前陶器で、主な器種は碗・皿である。品質は目痕を残す量産品も多いが、懐石具に使用したと考えられる高級品も含まれる。また、磚列建物を伴う地点では高級品の絵唐津皿・鉢などが組物で多量に出土する。

堺環濠都市遺跡における肥前陶器の出現は、大坂夏の陣層より下面から出土することは判明しているが⁶、大坂城跡のような詳細なその変遷を示す資料は乏しい。しかし、大坂夏の陣に関係する土層及び遺構からは肥前陶器が多量に出土し、16世紀末～17世紀前期には増加すると思われる。

また、先に述べた中国製磁器や肥前陶器の主な器種は食膳具であった。用途別組成において食膳具の比率は、大坂夏の陣より下面では調理具と近い値を示すが、本遺構ではそれより高い比率を示す。この要因は、17世紀前期に増加した肥前陶器と大きく関係すると考えられ、さらに、この様相は陶磁器の食膳具を日用器として受容する現れと考えられる。

焼締陶器では備前焼が高い比率である。主な器種は調理具の播鉢・徳利、貯蔵具の甕で、このうち甕は貯蔵具組成をみると備前焼 60%、土師質土器 40%にわけられ、備前焼甕の比率が高い（第 47 図）。SKT959 以外の地点では丹波焼甕や常滑焼甕も出土するが圧倒的に備前焼甕が多い。上野・高取焼は播鉢のみ出土する。本遺構では調理具組成において上野・高取焼播鉢が 32%と高い比率を示すが（第 46 図）、他の地点、例えばSKT39 では遺構によって比率が異なるものの備前焼播鉢は 30～50%を示し、これが主体と思われる。瀬戸美濃陶器はSKT39 S B 301 では 20%の比率を示すが⁷、総じて中国製磁器、肥前陶器より出土量は少ない。品質は量産品が多いものの、懐石具や茶器に使用したであろう志野焼、織部焼などの「桃山陶器」に分類される高級製品も僅かに出土する。

本時期の堺環濠都市遺跡は、産地別組成で土師質土器を主とし、これに中国製磁器、肥前陶器などの施釉陶器・磁器が続き、焼締陶器は備前焼が高い比率であった。また、用途別組成において食膳具が増加し、その要因も肥前陶器によるもので、これらの様相は大坂城跡と共通する。それに加えて遺跡内で地点の性格により高級陶磁器に受容差があることも同様である。したがって、本時期の大坂城跡・堺環濠都市遺跡は同一類型とみることができる。

3 京都（第 1・21 図－1）

⁶赤松和佳「近畿地方（3）大阪府下出土の肥前陶磁について」『国内出土の肥前陶磁 西日本の流通をさぐる 第一分冊』九州近世陶磁学会 2002年

⁷ 6と同じ。

京都は延暦 13 年 (794) に桓武天皇が平安京に遷都して以来、政治・経済の中心地として栄えた。中世の京都は、応仁の乱によって都は焼失し、二条通りを境目として北側を上京、南側を下京と呼ばれ、それぞれ別に惣構えを設けていた。これらは室町通りによって繋がり、その通りの周辺には農村集落が点在していた。その後、豊臣秀吉の京都改造が行われる。いわゆる「天正検地」が天正 15 年頃 (1587) より実施され、天正 19 年 (1591) には京都の中心部を囲うように土居を建設し、その内側を洛中、外側を洛外と称した。洛中には点在していた寺院を集約させるために寺町を造り、さらに内裏の修理や公家町の建設など大規模に行われ、近世都市京都が形成された。徳川幕府の誕生により政治の主体は江戸に移行するが、経済・文化の中心地として繁栄する。

発掘調査は、近世を層位的に行う例は僅かであり、総合的な遺構・遺物の検討は少ない。そのような状況であるが、平安京左京北辺四坊の公家町跡 (以下公家町跡と略す 第 20 図 - 1) と、洛中調査の一部遺構を分析することができた⁸。保管の関係で一部の陶磁器を細部まで器種分析できなかつた。なお、遺構の年代観については筆者が遺物を実見し、出土状況や遺物組成から再検討したものである。

① 16 世紀末～17 世紀前期

本時期の良好な資料として、公家町跡土坑 C548 が挙げられる。産地別組成を見てみると土師質土器が 90% を示す。そのため土師質土器以外の産地が 0.1% 以下に現れるので、陶磁器のみ数値化したため産地別組成のみに止めた。土坑 C548 の産地別組成では中国製磁器 62%、肥前陶器 22%、瀬戸美濃陶器 7%、備前焼 2%、朝鮮王朝陶磁器 1.5%、丹波焼 1%、信楽焼 0.5%、軟質施釉陶器 0.4%、産地不明陶器 3.6% と続く (第 21 図)。

土師質土器の主な器種は皿で、この他に鍋類・焼塩壺が出土する。皿はすべて手づくね成形で、胎土・成形方法から在地産が多いと思われる。皿はごく僅かに灯火芯を残すものもあるが、主として食膳具に使用したと考えられる。

土師質土器以外で最も高い比率を示すのは中国製磁器である。器種は碗・皿・鉢などの食膳具を中心に、瓶類・合子などの調度具もある。これらは景德鎮窯製品が多く、皿・鉢については漳州窯系が目立つ。また、中国製磁器の主器種は食膳具で、その組成でも高い比率を示す。これに続くのは肥前陶器で、主な器種は碗・皿・鉢などの食膳具である。品

⁸ 大都市の調査において、一調査区での土器・陶磁器の変遷がその都市の様相を示すことは弊害を生じることはわかっているが、特別な製品以外は大まかな組成は大差ないと考えられる。

質は主に絵唐津の懐石具と想定できる高級品が多く、無文で目痕を残す量産品は少なく、しかも組物での出土例が多かった。

京都における肥前陶器の出現時期は、実年代資料がないため詳細な変遷は判らないが、16世紀末～17世紀初頭と考えられる⁹。出現状況も本遺構が示すとおり、出現と同時に多量に出土すると思われる。

肥前陶器に続くのは瀬戸美濃陶器で、碗・皿・鉢などの食膳具が多い。品質は志野焼、織部焼など「桃山陶器」と呼ばれる上質な懐石具や茶器が大半を占め、粗雑な作りの量産品は少ない。

焼締陶器では備前焼が高い比率を示す。主な器種は播鉢・鉢・甕・壺である。播鉢はこれ他に信楽焼があり、これらは調理具組成で比率が拮抗する。甕も同様で信楽焼甕との数値が近接する。このように主器種は播鉢・甕でその状況は上記のとおりだが、大平鉢や水指などの製品が一定量出土するため、高い比率を示すと考えられる。

公家町跡以外に左京三条三坊十一町土坑 101 は洛中の資料である（第 20 図 - 2）。破片計測されており、産地別組成を見てみると土師質土器 78%、中国製磁器 10%、肥前陶器 4%、瀬戸美濃陶器 4%、信楽焼 3%、備前焼 0.3%、丹波焼 0.1%、常滑焼 0.1%、朝鮮王朝陶磁器 0.1%、その他 0.4%と続く（第 28 図）。用途別組成については食膳具 85%、調理具 3%、貯蔵具 10%、調度具 2%にわかる（第 29 図）。

これら産地・用途別組成はほぼ公家町跡と共通する。但し、出土遺物を詳細に検討すると、品質でわけた場合、瀬戸美濃陶器は「桃山陶器」に分類される志野焼や織部焼などの懐石具・茶器や中国製磁器は明末清初の景德鎮窯の碗・皿などの食膳具が一定量出土するが、その一方で、粗雑な作りの量産品も多く出土する。したがって、洛中でも地点によって高級陶磁器の受容に差異があることがわかった。

土坑 101 では焼締陶器は信楽焼の比率が高い。主な器種は播鉢で調理具組成では本産地のみで（第 31 図）、公家町とは異なる。他の洛中の遺跡では、信楽焼播鉢が多い。焼締陶器は他に備前焼、丹波焼、常滑焼が出土し、これらの器種は貯蔵具の甕で、その比率は備前焼 72%、土師質土器 14%、常滑焼 12%、丹波焼 2%と続き（第 32 図）、備前焼が高い比率である。この様相は公家町跡と組成が異なる。ちなみに 16 世紀末以前の京都の播鉢・甕などの主産地は備前焼が多い傾向にある。したがって、本時期から京都では信楽焼が増

⁹ 稲垣正宏「近畿地方（1）」『国内出土の肥前陶磁 西日本の流通をさぐる 第一分冊』九州近世陶磁学会 2002 年

加したと考えられる。

本時期の京都の産地別組成は、土師質土器が主体で、これに中国製磁器や肥前陶器などの施釉陶器・磁器が続き、用途別組成で食膳具が多い。これらの点は大坂城跡と共通する。さらに、京都では高級陶磁器が多く出土するが、遺跡内でその受容に差があることも同じである。したがって、本時期の京都は大坂城跡と同一類型に属するとみることができる。

だが異なる様相も呈している。焼締陶器の主産地は両遺跡とも備前焼であるが、京都では焼締陶器の主製品である播鉢・甕の組成では信楽焼が備前焼と拮抗して出土しており、遺跡に近い窯場からの流入が認められる。

さらに、大坂城跡ともっとも異なる点は、京都において土師質土器皿が多量に出土することであり、この点は同一類型とする堺環濠都市遺跡でも認められず、京都の特徴と考えられる。京都では土師質土器皿を日用食器として使用するその多くが儀式・礼儀・年中行事などで使用するためであろう。特に、公家町跡は他の洛中より多量に出土することからもそれを裏付ける。

② 17世紀後期～18世紀前期

公家町跡の穴蔵F1387は宝永2年（1705）の大火に伴う整地層に覆われた廃棄土坑である。産地別組成を見てみると本遺構でも土師質土器が98%を示し、それ以外の産地は0.1%以下となった。そのため陶磁器の分析のみおこない、数値化は産地別組成のみに止めた。陶磁器の産地別組成では肥前磁器55%、京焼系陶器18%、肥前陶器11%、信楽焼7%、軟質施釉陶器1.4%、瀬戸美濃陶器1.3%、中国製磁器0.7%、備前焼0.6%、丹波焼0.3%、その他4.7%と続く（第21図）。

土師質土器の器種は前代と変わりなく皿が多い。成形は手づくねとロクロで、胎土の色調も多種あるが、これらの分布範囲から在地産と考えられる。皿の口縁部には灯火芯を残すものもあるが、多くは食膳具として使用する。他に羽釜・土鍋・焙烙などの鍋類があり、この時期から焙烙が高い比率を示す。

産地別組成で比率が高いのは肥前磁器で、京都では肥前磁器は17世紀前期に出現する。17世紀中期～17世紀後期の時期とする公家町跡土坑F1244の産地別組成でも肥前磁器41.32%と半数近い比率を示し、本遺構と同様に肥前磁器の比率が高い。したがって、肥前磁器は前代から上昇すると考えられる。主な器種は碗・皿である。前代では陶磁器の高級品は明末清初の中国製磁器の青花や瀬戸美濃陶器の「桃山陶器」に分類される志野焼や織

部焼などの懐石具や茶器であったが、本時期には有田町で生産された染付や色絵製品が主体となる。その他には「くらわんか手」とよばれる量産品も出土するが、その割合は量産品1に対して、高級品4で後者が多い。しかし、公家町跡以外の洛中の遺跡でも高級品の様相は公家町と同じだが、割合が量産品3に対して、高級品2となり、こちらは量産品の数値が高く、洛中でも高級品の受容に差異があることが判明した。

施釉陶器で高い比率を示すのは京焼系陶器である。これは17世紀中期から出現し、その時期と考えられる公家町跡土坑F1244の産地別組成では、京焼系陶器は4.22%とごく僅かで、17世紀後期～18世紀前期に急増していることが明確となる。主な器種は碗・鉢・鬚水入れで、このうち碗の出土量が多い。食膳具組成では肥前磁器を下回るが、この他の肥前陶器や瀬戸美濃陶器の比率より大きく上回る。施釉陶器碗は京焼系陶器に主体が移行することがわかった。碗の器形は丸碗・筒型碗・平碗があり、装飾も色絵・錆絵・錆絵染付と多彩である。また、本遺構からは出土していないが同時期とする土坑B776、土坑H166からは土鍋も出土する。

京焼系陶器に次ぐのは肥前陶器で、主な器種は碗・鉢と前代と変わらない。瀬戸美濃陶器も前代より出土量が減少し、天目碗や量産品の皿が僅かに出土する程度となる。

中国製磁器は、16世紀末～17世紀前期にみられた組成から一変し、産地別組成において1%未満の比率まで下降する。但し、洛中の平安京左京四条三坊十二町跡¹⁰ではSK48は18世紀前期～18世紀中期の年代観をもつ遺構であるが、ここからは中国製磁器の食膳具が42%を示している。製品は明末清初の青花碗・皿が多いが、宋代の青磁壺や清朝磁器の青花碗・皿など出土しており、洛中でも地点によって依然として中国製磁器の比率が高い例もある。

施釉陶器の次に焼締陶器の信楽焼が続く。主な器種は播鉢・甕である。播鉢は信楽焼、丹波焼、備前焼が出土し、これらのうちで信楽焼播鉢が多量である。16世紀末～17世紀前期では備前焼播鉢と拮抗したが、17世紀中期～17世紀後期には丹波焼播鉢が急増する。しかし、本遺構の出土状況から、17世紀後期～18世紀前期には再び信楽焼播鉢が急増し、播鉢の主体に変わることがわかった。甕は備前焼、丹波焼、信楽焼が出土し、三者が競合するがやや信楽焼甕が優勢となる。

本時期の京都の産地別組成は、前代に主体であった中国製磁器、肥前陶器を抜いて肥前

¹⁰ 財団法人京都市埋蔵文化財研究所『平安京左京四条三坊12町跡』2007年

磁器が高い比率を示すようになる。その要因が食膳具の増加であり、その傾向も 17 世紀中期～後期に現れる。これらの点は大坂城跡と共通する。加えて遺跡内で地点の性格によって高級陶磁器に受容の違いがあることも同様である。さらに、播鉢・甕などの主産地は前代では両遺跡は備前焼であったが、大坂城跡は丹波焼、京都は信楽焼と、どちらも近郊の産地を主に受容する傾向は共通する。したがって、本時期の京都は大坂城跡と同一類型とみることができる。

但し、相違点もある。京都の施釉陶器の主体は京焼系陶器であるが、大坂城跡では前代と変わらず肥前陶器が主で、京焼系陶器の比率は低い。したがって、京焼系陶器の受容は 17 世紀後期～18 世紀前期の地元の京都を中心であったと考えられる。

③ 18 世紀後期～19 世紀前期

本時期の資料として公家町跡土坑 B716 があり、本遺構は天明 8 年（1788）の大火の整地層を掘り込む廃棄土坑である。産地別組成を見ても本遺構でも土師質土器が 85% を示し、それ以外の産地は 1% 以下となった。そのため陶磁器のみ分析し、数値化は産地別組成のみに止めた。京焼系陶器 59%、肥前磁器 31%、瀬戸美濃陶器 6%、肥前陶器 0.2%、信楽焼 1%、丹波焼 0.9%、中国製磁器 0.3%、堺・明石焼 0.03%、備前焼 0.07%、その他 1.5% と続く（第 22 図）。

前代の組成と変化するのは、産地別組成において京焼系陶器が肥前磁器に変わり主体となることである。器種は前代では碗と煮沸具が主であったが、食膳具の碗・鉢、調理具の汁注ぎ・土瓶・土鍋・行平、調度具の灯火具・神仏具・化粧具・その他と器種が増加する。また、本時期でも碗が多いが、煮沸具の比率が碗を大きく上回っている。したがって、京焼系陶器の増加の第一の理由は煮沸具によることがわかった。

肥前磁器は前代より比率を下げるものの、食膳具の碗・皿・鉢・小坏、調度具の化粧具・神仏具・蓋物・瓶類などが出土し、豊富な器種組成である。主製品は前代に引き続き碗・皿などの食膳具で、両器種ともに大きさ、器形にバリエーションがみられ、皿については組物が目立つ。また、食膳具組成でも京焼系陶器より高い比率を示すことから、肥前磁器の量比は前代と大きく変化しないと考えられる。品質は有田町で生産された高級品 2 に対して、「くらわんか手」などの量産品 3 で、前代と変わらない。

焼締陶器は前代よりさらに比率を下げる。信楽焼、堺・明石焼、丹波焼、備前焼が出土し、すべて産地別組成において 1% 未満である。これらの主な器種は播鉢と甕である。播

鉢は堺・明石焼、信楽焼が出土するが、堺・明石焼播鉢の比率が高く、本時期には播鉢の主産地が変わる。甕は信楽焼、丹波焼があり、これは前代に引き続き信楽焼甕が主体である。この他、丹波焼、備前焼は徳利が出土するが、全体量は少ない。瀬戸美濃陶器は、碗・鉢などの食膳具も出土するが、火鉢・水鉢などの大型製品が多く出土し、それにより前代より比率を上げる。

土師質土器は、本時期でも皿が多く、他器種との比率差はあるが、18世紀代より比率を下げる。また、火鉢・焜炉類は急増する。

本時期の京都の産地別組成は肥前磁器に変わって京焼系陶器が主体となる。用途別組成でも調理具が食膳具と入れ替わるなど変化がみられた。この産地・用途別組成の変化は京焼系陶器の煮沸具の急増によるものだが、食膳具組成は前代と変わらず肥前磁器を主に受容し、17世紀後期以降、その様相は継続する。また、焼締陶器は堺・明石焼播鉢が主産地と変わる。これらの諸点は大阪城跡と共通し、本時期も両遺跡を同一類型とみることができる。

4 奈良町遺跡（第36図-1）

大坂城跡と土器・陶磁器様相が類似するのが奈良県奈良市に所在する奈良町遺跡である。本遺跡は、平城京の外京にあたり、周辺には東大寺や春日大社などが古来より存在した地域である。

豊臣政権下のもと、奈良椿井町に代官所が置かれ、文禄4年（1595）に行われた大和惣国検地の際に町切りが実施され、奈良町100町が確定された。慶長8年（1603）に徳川幕府が成立すると、家康の側近大久保石見守長安が奈良代官に任命され、慶長18年（1613）、奈良奉行所が置かれ、これ以降、徳川幕府の直轄地となる。

また、奈良町は東大寺や春日大社の門前町として栄え、興福寺境内には筆・墨などの手工業が発展したことにより、商業都市としての一面もある。

① 16世紀末～17世紀前期

本時期の良好な資料としてSE16がある。検出地点は平城京第424次調査(左京四条六坊十四坪)で、近世は奈良町に属する。

産地別組成を比率の高い順に配列すると土師質土器67%、瓦質土器28%、瀬戸美濃陶器1.9%、中国製磁器0.84%、信楽焼0.8%、肥前陶器0.7%、備前焼0.6%、常滑焼0.16%

と続く（第 37 図）。用途別組成は食膳具 29%、調理具 36%、貯蔵具 1%、調度具 34%に
わかれる（第 38 図）。

産地別組成で高い比率を示す土師質土器の器種は、皿 25.6%、釜 10.2%、焼塩壺 0.1%
である。本遺構では皿の破損が著しいため数値が高く現れたが、個体数では 50%であると
思われる。皿は灯火芯を残すものもあるが僅かで、多くは食膳具に属し、その組成は 87.8%
と大半の数値を示す（第 39 図）。

土師質土器に次ぐのは瓦質土器で、器種は火鉢 23.2%、播鉢 4.5%、壺 2.7%、捏鉢 0.5%、
風炉 0.1%、蓋 0.1%、瓦燈蓋 0.1%、不明 0.4%と豊富な組成である。また、瓦質土器も
鉢の破損が激しいため高い比率を示したが、個体数では 10%を示す。もっとも多い火鉢は
調度具組成で 65%を示し、瓦質土器の主体をなす（第 42 図）。播鉢は調理具組成では瓦質
土器 12%、信楽焼 1%であり、瓦質土器播鉢が圧倒的に高い比率を示し（第 40 図）、本遺
跡では陶器播鉢ではなく、瓦質製品が主体であることが明らかとなった。

これら土器類に続くのは瀬戸美濃陶器である。器種は碗・皿・鉢などの食膳具、調度具
の壺である。食膳具組成をみると、土師質土器 87.8%、瀬戸美濃陶器 7.3%、中国製磁器
3.1%、肥前陶器 1.8%と（第 39 図）、施釉陶器・磁器の中では瀬戸美濃陶器の比率が高い。
先にも述べたが土師質土器は個体数ではもう少し低い比率で、瀬戸美濃陶器や後に述べる
中国製磁器、肥前陶器などの比率は 10%台を示す。本産地の特徴は懐石具・茶器に分類さ
れる志野焼や黄瀬戸などの「桃山陶器」と呼ばれる高級品が多く、無文で粗雑な作りの量
産品は少ない。但し、同時期の第 48 次 SE16 においては量産品のみで構成される例もあ
る。

中国製磁器は皿・鉢が出土する。本遺構では瀬戸美濃陶器より比率は低い、第 48 次
SE16 では中国製磁器 1.9%、瀬戸美濃陶器 0.9%の組成で、前者が高い比率を示す。中国
製磁器は景德鎮窯の青花を中心とし、漳州窯系の呉須赤絵と呼ばれる色絵の鉢・皿などの
高級品が出土し、量産品との割合は高級品 3 に対して量産品 2 となる。このように地点に
よって中国製磁器の高級品を多く受容する様相がみられる。この他に、施釉陶器・磁器で
は肥前陶器が出土する。器種は碗・皿・鉢で、食膳具組成は先に述べた通り、他の施釉陶
器・磁器と比べて比率が低い（第 39 図）。

焼締陶器では信楽焼の比率が高い。主な器種は播鉢・甕で、播鉢は先に述べた通りであ
るが、甕は貯蔵具組成によると備前焼 38%、信楽焼 32%、常滑焼 11%、土師質土器 9%、
瓦質土器 2%にわかれ、備前焼の比率が高い（第 41 図）。ただ、第 48 次 SE16 では信楽

焼 32%、備前焼 30%であり、このように信楽焼甕が多い例もあることから、奈良町遺跡の焼締陶器は備前焼と信楽焼が競合すると思われる。

本時期の奈良町遺跡の産地別組成は土師質土器を主体とし施釉陶器・磁器が続く。用途別組成は食膳具が高い比率を示し、その中心は施釉陶器・磁器である。また、遺跡内で地点の性格によって高級陶磁器の受容に差がある。これらの様相は大坂城跡と共通することから、両遺跡を同一類型とみることができる。

ただ相違点もある。土師質土器皿が多量に出土することは大坂城跡ではみられず、むしろこれは京都と類似する。出土した皿の中に梵字が書かれたものがある。奈良町は東大寺や春日大社の門前町であり、食膳具としての使用の他に、祭祀的な行事で頻繁に使われたためと思われる。

さらに、本遺跡では瓦質土器が高い比率だが、大坂城跡では5%未満と低く、京都や堺環濠都市遺跡でも低い比率である。火鉢・焜炉類は共通して出土するが、本遺跡のような豊富な組成ではない。近畿では11世紀以降、瓦器生産が活発となり、各地で小規模な窯が造られ、それらでは豊富な器種を生産し、近隣に流通したことが遺跡の出土状況からわかる¹¹。一方で、椀・鍋類・火鉢・甕などは広域に流通し、その中でも「奈良火鉢」は代表的であり、全国各地の遺跡から出土し、広域に流通した。15世紀末に至ると、国産陶器の生産が本格化すると瓦質土器の生産・流通が急激に下降し、16世紀以降は鍋類・播鉢・甕などの器種に限定され、その量も次第に減少していく。その状況は先に述べた大坂城跡・堺環濠都市遺跡・京都での産地・用途別組成に現れるが、奈良町遺跡では本時期に至っても中世からの状況が続いたと思われる。

② 17世紀後期～18世紀前期

良好な資料として平城京第424次調査(奈良町遺跡)のSE17がある。産地別組成は土師質土器37%、瓦質土器19%、肥前磁器15%、信楽焼12%、肥前陶器9%、中国製磁器4.3%、備前焼2%、京焼系陶器1%、軟質施釉陶器0.7%と続く(第37図)。用途別組成は調度具51.5%、食膳具30%、貯蔵具9.5%、調理具9%にわかれる(第38図)。

前代より比率が下降するが、依然として高い比率を示すのは土師質土器である。器種は皿・焙烙・焼塩壺・高坏が出土し、皿は灯火芯を残すものが僅かにみられるが、食膳具が

¹¹ 菅原正明「「瓦器」は何を語るか」『中近世土器の基礎研究VI』日本中世土器研究会 1990年

主体である。その組成では 46.3%と高い比率だが、前代より半減する（第 39 図）。但し、本遺構でも皿の破損が著しく、個体数では肥前磁器と近接した値を示す。出土量は僅かであるが高坏も出土する。この形状は、現在、春日大社の神饌しんせんを盛る「ゴンバイ」と称す高坏と類似するため、祭祀用に使用したと考えられる。

瓦質土器の器種は鉢類・風炉・壺・釜が出土する。鉢類は「コンバイ」と思われるものを多く含み、他の鉢類も祭祀用と考えられるが、大きさ・器形にバリエーションがみられ器種の特定には至らなかった。そのような理由から多くを調度具に分類したため、調度具の比率が高くなった。同時期の遺構でも食膳具の比率が高い傾向がみられる。

肥前磁器は施釉陶器・磁器で最も高い比率を示す。食膳具の碗・皿・鉢、調度具の瓶類が出土し、この中で食膳具の出土量が多い。その組成は先に述べたように土師質土器と近接した値だが、これに続く施釉陶器・磁器を大きく上回ることから、肥前磁器が施釉陶器・磁器の食膳具において中心であったと考えられる。また、前代では陶磁器の高級品は明末清初の中国製磁器の青花や瀬戸美濃陶器の「桃山陶器」に分類される志野焼や黄瀬戸などの懐石具や茶器であったが、本時期には有田町で生産された染付や色絵の食膳具が主体となる。本遺構からはまとまって色絵皿が出土したが、「くらわんか手」とよばれる量産品も出土する。その割合は量産品 3 に対して、高級品 2 で前者が多い。

肥前磁器に続くのは信楽焼で播鉢・甕が出土する。調理具組成によると播鉢は信楽焼 18%のみである（第 40 図）。前代では備前焼、丹波焼が出土したが、本時期では出土しておらず、本遺跡の播鉢は信楽焼が市場を独占していたと考えられる。貯蔵具組成をみると甕は信楽焼 55%、瓦質土器 30%、備前焼 15%にわかれ、信楽焼甕が高い比率を示す（第 41 図）。したがって、本時期における焼締陶器の主産地は信楽焼に変化する。

これに続くのは肥前陶器で、食膳具の碗・皿・鉢が出土する。その組成では肥前磁器とは大差があったが、前代で多く出土した瀬戸美濃陶器はなく、肥前陶器が施釉陶器の主産地に変わる（第 39 図）。中国製磁器は 16 世紀末～17 世紀前期の伝世品と考えられる皿・鉢がみられ、その量は前代より減るが一定量出土する。

以上述べた施釉陶器・磁器は、食膳具組成を材質でわけた場合には土師質土器 46.3%に対して 53.7%と上回っており、本時期には施釉陶器・磁器の食膳具が主体となる。その要因は肥前磁器の出土量によることは言うまでもない。

この他に、京焼系陶器がこの時期から出現する。全体の比率は低いだが、食膳具の碗、調理具の鍋がみられる。

本時期の奈良町遺跡の産地別組成は、肥前磁器の増加により施釉陶器・磁器の比率が全体的に上がり、用途別組成でも食膳具が前代と変わらず高い比率を示していた。これは大坂城跡と共通する。さらに、京焼系陶器などの新しい産地の出現やその出土状況も同じである。他に播鉢・甕などの主産地が大坂城跡とは異なるが、近在する産地を受容する点では大坂城跡とその様相が共通する。

この時期の奈良町遺跡と大坂城跡との相違でもっとも重要なのは、産地別組成において土師質土器・瓦質土器の比率が高いことである。大坂城跡では肥前磁器が高い比率を示しており、本遺跡の様相は京都と類似するが、瓦質土器の状況は異なる。これら土器類には祭祀用具が多いことから、奈良町遺跡では信仰的な行事での使用が頻繁に行われたことによると考えられる。

さらに、大坂城跡では遺跡内で地点の性格によって高級陶磁器の受容に差異があったが、本遺跡ではそのような例はない。しかし、肥前磁器の高級品や中国製磁器が一定量出土することから、大坂城跡と大差ないと考えられる。

③ 18世紀後期～19世紀前期

本時期の資料として正暦寺境内1・2次調査SX05がある(第36図-2)。正暦寺は、春日山南端に広がる山岳寺院である。正暦3年(992)に一条天皇の勅願寺として創建されたと伝えられている¹²。SX05は奈良町遺跡の資料ではないが、本遺跡の土器・陶磁器の様相が奈良町遺跡の特徴を示していると考えられるため採用した。

産地別組成は土師質土器37%、京焼系陶器32.2%、肥前磁器15%、信楽焼8%、瓦質土器4%、肥前陶器1.4%、備前焼0.2%、瀬戸美濃陶器0.2%と続く(第37図)。用途別組成は食膳具42%、調度具32%、調理具18%、貯蔵具8%にわかれる(第38図)。

産地別組成で高い比率を示すのは土師質土器である。主な器種は前代と同様に皿で、灯火芯を残すものが多く、食膳具としては28%と前代より少なくなる(第39図)。但し、同時期の奈良町遺跡では30%台であることから¹³、下降するとはいえ一定量は出土する。さらに町屋から出土する皿には「春日」・「春日大社」と墨書されたものがあり、本時期でも祭祀的な使用が多かったと思われる。

次に続くのは京焼系陶器で、器種は食膳具の碗・鉢、調理具の土鍋・土瓶・爛徳利、貯

¹² 『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成10年度』奈良市教育委員会 1990年

¹³ 未報告資料で調査担当者のご好意により実見させていただいた。

蔵具の壺、調度具の灯火具・尿瓶と豊富な組成である。特に、煮沸具は調理具組成では京焼系陶器土瓶 32%、京焼系陶器土鍋・行平 21%と高い比率を示す（第 40 図）。前代から土鍋は出土したが、この時期には土鍋より行平が主体となる。また、土瓶も鍋類に近接する比率であることから、煮沸具が一気に上昇したことがわかり、これにより産地別組成において京焼系陶器の比率が上がったと思われる。

京焼系陶器に続くのは肥前磁器である。器種は食膳具の碗・皿・鉢を主とし、その組成をみると肥前磁器 60%と依然として高い比率であることから（第 39 図）、その様相は前代から継続することがわかった。

焼締陶器は前代と変わらず信楽焼の比率が高い。器種組成も同じで播鉢・甕が出土する。これらは各用途別組成でも比率が高い（第 40・41 図）。

瓦質土器は前代より激減し、調理具の羽釜、調度具の火鉢、貯蔵具の甕が僅かに出土する程度となる。この他、肥前陶器は鉢、堺・明石焼は播鉢が出土するが僅かである。

本時期の奈良町遺跡の産地別組成は京焼系陶器が急増し、肥前磁器の比率を上回る。用途別組成でも食膳具を抜いて調理具が高い比率を示すなどの変化は、大坂城跡と共通する。このことから両遺跡は同一類型とみることができる。

しかし、産地別組成において土師質土器が高い比率を示すことは大坂城跡にはみられない。これは前代でもみられ本時期でもその様相が継承される。また、甕の主産地も大坂城跡と異なるが、同類型とする京都と共通し、前代と同様に信楽焼の主な市場であったと思われる。播鉢について大坂城跡はもちろんのこと、共通点の多い京都とも違っていた。これらでは堺・明石焼が多く出土したが、奈良町遺跡には本産地が流入されなかったことがわかる。

5 小結

大坂城跡を基準として、これに堺環濠都市遺跡、京都、奈良町遺跡を比較する形で検討を加えた。16 世紀末～17 世紀前期の 4 遺跡の産地別組成は、共通して土師質土器が高い比率を示すが、肥前陶器や中国製磁器などを主とする施釉陶器・磁器が多く出土し、焼締陶器の比率は低い組成である。4 遺跡ともに、前代には調理具や貯蔵具の土器や焼締陶器を主体とする組成であったものが、施釉陶器・磁器の食膳具を中心とする組成に変化しており、施釉陶器・磁器の食膳具を日用器として受容していたことが明確になる。さらに 4 遺跡ともに、高級品の施釉陶器・磁器が一定量受容しており、また 4 遺跡とも突出して品

質の高い陶磁器が出土する例も認められ、遺跡内の経済的格差によって、陶磁器受容に差異があることがわかった。

17世紀後期～18世紀前期に至ると、堺環濠都市遺跡は本類型から外れる。産地別組成では3遺跡ともに土師質土器が減少し、反比例するように肥前磁器が急増し、京焼系陶器や堺・明石焼などの新産地が加わるようになる。用途別組成では、前代に比べると肥前磁器の量産品食膳具の出土量が増え、食膳具の日用器化が進んでいく。また、他の2遺跡と比較して、京都ではこの時期に地元の京焼系陶器が高い比率を示している。

大坂城跡と京都では前代と同様に、遺跡内で高級陶磁器が突出して高い比率を示しており、両遺跡では本時期にも経済的格差による異なった陶磁器受容がみられた。しかし、この時期から奈良町遺跡では、遺跡内において突出して高級陶磁器の比率が高い例がなくなるが、肥前磁器の高級品や中国製磁器が一定量出土することから、他の同類型遺跡と大差ないと考えられる。

また、前代では焼締陶器の播鉢・甕は広域流通品である備前焼を中心に受容していたが、この時期には遺跡近郊の産地の製品を主に受容するようになる。

18世紀後期～19世紀前期になると、大坂城跡・京都・奈良町遺跡の3遺跡の産地別組成では京焼系陶器が急増し、前代まで中心であった肥前磁器と主体が変わる。京焼系陶器の主器種は調理具の煮沸具で、この増加により、用途別組成においても調理具が前代まで主体であった食膳具を抜くようになる。

また、京都や奈良町遺跡では中世的な生活様式が継承されたために、近世を通して土師質土器皿の出土量が多いのも特色である。

このように若干の差異はあるものの、近世における産地別組成や用途別組成の変化は概ね共通しており、ことに大坂城跡と京都は共通した様相を呈していた。したがって、3遺跡(17世紀後期以前は4遺跡)を同一類型に属するとみなし、これをI都市型遺跡とした。

第2節 近畿の城下町型遺跡における土器・陶磁器の様相

前節ではI都市型遺跡の土器・陶磁器の特徴を述べた。本節ではこれらとは異なる土器・陶磁器組成を示す一群の出土状況を述べ、その特徴を明らかにする。その代表例として明石城武家屋敷跡を基準とし、時期区分については、ほぼ都市型遺跡と同じであったため、その画期に準じて検討する。

1 明石城武家屋敷跡

① 17世紀前期～17世紀中期

この類型の代表的な遺跡が兵庫県明石市に所在する明石城武家屋敷跡である（第 68 図 - 4）。明石城は、元和 3 年（1617）に外様大名、小笠原忠政によって築かれ、明治 4 年（1871）の廃藩置県まで存続する。

17 世紀前期の資料として 9 地点 SK04 が挙げられる。産地別組成を比率の高い順に配列すると、土師質土器 32%、肥前陶器 32%、丹波焼 12%、中国製磁器 10%、肥前磁器 9%、瀬戸美濃陶器 3%、備前焼 2% と続く（第 81 図）。用途別組成は食膳具 79%、調理具 19%、貯蔵具 2% と（第 82 図）、食膳具の比率が高い。

産地別組成で高い比率を示すのは土師質土器で、主な器種は皿・焙烙・焼塩壺である。これらの成形方法や胎土の特徴から在地産が多いと思われる。このうち皿は灯火芯を残すものが目立ち、主に灯火具として使用されたと考えられる。

土師質土器と同率なのが肥前陶器である。主な器種は碗・皿・鉢で、これらは食膳具組成において 45% ともっとも比率が高い（第 83 図）。品質は目痕を残す無文の量産品 3 に対して、懐石具に分類される高級品の絵唐津 2 であり、品質の良いものも一定量出土する。

焼締陶器では丹波焼の比率が高い。主な器種は調理具の播鉢、貯蔵具の壺、調度具の鉢が出土する。調理具組成のうちで播鉢は丹波焼 55%、備前焼 5% と圧倒的に丹波焼の比率が高い（第 84 図）。壺は、本遺構では丹波焼のみであった。また、同時期とする 21 地点 SK26・SK144 より甕が多く出土することから、本遺跡における貯蔵具の主産地は丹波焼だと思われる。

丹波焼に続く比率を示すのは中国製磁器である。食膳具の皿が出土し、その組成で 20% の比率を示し（第 83 図）、皿は土師質土器皿 38% ともっとも高いが、中国製磁器皿は 20% を示し他の陶磁器と比べると大差がみられる。景德鎮窯の青花が多いが、漳州窯系の青花も僅かに含まれる。

中国製磁器に続くのが肥前磁器である。主な器種は食膳具の碗・皿・鉢で、本遺構では碗と皿の比率値は近いが、同時期の 21 地点 SK26 では碗 7 に対して皿 3 と圧倒的に碗が多い。瀬戸美濃陶器は、先に述べた肥前陶器や肥前磁器などの施釉陶器・磁器と比べて出土量が少ない。器種は「桃山陶器」に分類される志野焼の懐石具で、無文で粗雑なつくりの量産品は出土していない。

以上のように、肥前陶器を中心に中国製磁器、肥前磁器などの施釉陶器・磁器が高い比率を示し、瀬戸美濃陶器も合わせると50%となる。これらの主な器種は碗・皿であり、用途別組成において食膳具が高い比率を示したのは、施釉陶器・磁器の影響によることがわかった。また、それは施釉陶器・磁器の食膳具を日用器として使用した現れと考えられる。

明石城武家屋敷跡の17世紀前期～17世紀中期は、産地別組成で肥前陶器が高い比率を示し、これを含む施釉陶器・磁器が主体とする組成である。焼締陶器は丹波焼が多く出土し、播鉢・甕などを主製品とする。また、用途別組成では食膳具が高い比率を示すことから、主に施釉陶器・磁器の食膳具を日用器として受容したと考えられる。

② 17世紀後期～18世紀前期

本時期の遺構として21地点SK48がある。産地別組成を見てみると肥前磁器40%、土師質土器22%、丹波焼12%、京焼系陶器11%、肥前陶器6%、堺・明石焼5%、備前焼4%と続く(第81図)。用途別組成は食膳具70%、調理具21%、貯蔵具9%で、食膳具の比率が高い(第82図)。

産地別組成で高い比率を示すのは肥前磁器である。前代では肥前陶器より低い比率であったが、本遺構では大きく上回る。この傾向は17世紀後期より現れる。その状況を示す良好な遺構が乏しく、数値として示せないが、前期のSX01の上層遺構から肥前磁器が急増し、土師質土器を上回る。肥前磁器の主な器種は食膳具であり、増加の要因はこれによると思われる。SK48からは主に碗・皿・鉢などの食膳具が出土し、その組成をみると肥前磁器63%、京焼系陶器20%、肥前陶器17%で(第83図)、肥前磁器の食膳具が前代よりさらに増加することが明らかとなる。また、前代では明末清初の景德鎮窯青花や「桃山陶器」に分類される志野焼や肥前陶器の懐石具が出土したが、本時期にはこれらは見られず、有田町で生産された染付や色絵の高級食膳具が出土する。その一方で「くらわんか手」などの量産品もみられ、高級品との割合はこれが2に対して、「くらわんか手」などの量産品が3と後者が多い。

肥前磁器に続いて比率が高いのは土師質土器で、器種は皿・焙烙・焜炉が出土する。皿は前代より減少し、食膳具組成で1%まで下がる(第83図)。また、同時期の21地点SK25でも灯火具が10%程度に過ぎず、本遺跡において皿の比率は前代より減少したと考えられる。その一方で、焙烙は比率を上げる。調理具組成をみると50%を示し(第84図)。土師質土器の全体量が前代と大きく変わらなかったのはこのためと思われる。

焼締陶器で高い比率を示すのは、前代と変わらず丹波焼である。主な器種は調理具の播鉢、貯蔵具の甕・壺で、各用途別組成でも高い比率を示す。同じ焼締陶器の堺・明石焼、備前焼は丹波焼に比べると比率は低いものの播鉢と鉢が出土する。

これらに続くのは京焼系陶器で、この時期から新たに出現する。主な器種は食膳具の碗・皿・鉢で、その組成では同じ施釉陶器の肥前陶器 17%に対して京焼系陶器 20%と高い(第 83 図)。この要因は、京焼系陶器の中に地元産の明石焼が含まれるためである。伝承によれば明石焼は元和 8 年(1622)に藩の御用窯として開窯し、寛永 2 年(1625)に民窯に代わり、それ以後、操業し続けたといわれているが、その実体は明らかでなく、考古学的な発掘調査は 19 世紀代の窯の一部で行なわれているのみである。しかし、現在、伝世品などから開窯時期は江戸中期以降で、窯道具の特徴から京焼の技術的系譜を引くと考えられている。明石焼と京都焼との識別は困難で、したがって京焼系陶器に多く含まれるため、肥前陶器より高い比率を示すと考えられる。

肥前陶器は前代より比率が下がる。これは肥前磁器の急増、京焼系陶器の出現による影響も考えられるが、全体量が前代より減少することも確かである。

明石城武家屋敷跡における 17 世紀後期～18 世紀前期には、産地別組成において前代まで主体であった肥前陶器に変わり肥前磁器が高い比率を示す。さらに、京焼系陶器、堺・明石焼が新たに出現し、京焼系陶器は産地別組成において施釉陶器の中心となる。また、焼締陶器は前代と変わりなく丹波焼が高い比率を示す。

③ 18 世紀後期～19 世紀前期

本時期の遺構として 8 地点 S K 101 がある。産地別組成は肥前磁器 34%、京焼系陶器 32%、堺・明石焼 20%、土師質土器 8%、丹波焼 4%、肥前陶器 2%と続く(第 81 図)。用途別組成については食膳具 98%、調理具 2%にわかれる(第 82 図)。

18 世紀代と変わりなく産地別組成で高い比率を示すのは肥前磁器である。主な器種は食膳具の碗・皿・鉢で、その組成では肥前磁器 78%、京焼系陶器 19%、肥前陶器 3%を示し(第 83 図)、依然として比率が高い。本時期でも有田町で生産された染付や色絵の高級食膳具が出土し、量産品との割合は高級品 2 に対して、「くらわんか手」などの量産品 3 で、前代と変わらず高級品も一定量出土する。また、本時期には器形や大きさにバリエーションがみられる。

肥前磁器に次ぐのは京焼系陶器である。S K 49 と比べると比率は上昇し、肥前磁器と近

接する数値に変わる。器種は食膳具の碗、土鍋・行平などの調理具、灯火具・餌鉢・水滴などの調度具で豊富な組成である。出土量が多い器種は、前代と同様に碗と煮沸具で、碗は食膳具組成において肥前磁器に次いで高い比率を示し（第 83 図）、煮沸具も調理具組成で 17%と前代より比率を上げる（第 84 図）。したがって、これら器種の増加によって産地別組成で京焼系陶器の比率が上昇すると考えられる。また、京焼系陶器の中には、舞子焼や明石焼など同じ京焼の技術的系譜を引く在地産の製品も多く含まれていると思われ、これらは遺跡近郊で生産が始まると同時に大量に流通したと思われる。

焼締陶器で比率が高いのは堺・明石焼で、主な器種は播鉢である。調理具組成を見てみると播鉢は本産地のみで、播鉢の主産地が丹波焼から堺・明石焼に移行している（第 84 図）。

前代まで高い比率を示した土師質土器は本時期には減少する。主な器種は焙烙で、前代と変わらず調理具組成において高い比率を示す。また、同時期の 21 地点 SK38・SK49 から皿・焔炉類も出土する。丹波焼は甕が出土し、貯蔵具組成を見てみれば丹波焼甕のみであった（第 85 図）。

明石城武家屋敷跡の 18 世紀後期～19 世紀前期は、京焼系陶器碗・煮沸具の増加によって、産地別組成において肥前磁器と近接した比率に変わる。しかし、食膳具組成で肥前磁器が依然として高い比率を示すことから、本産地には影響がなかったと考えられる。また、焼締陶器の主器種である播鉢は堺・明石焼にその主体は移行するが、甕については前代と変わりなく丹波焼が中心であった。

2 伏見城跡

明石城武家屋敷跡の分析結果と類似するのが伏見城跡である（第 20 図 - 4）。本遺跡は、京都市伏見区に所在する。伏見城は文禄元年（1592）に豊臣秀吉によって構築され、その直後の慶長元年（1596）の大地震で倒壊するが、すぐに大規模な城郭として再建される。秀吉は慶長 3 年（1598）に本城で終焉し、その後、慶長 5 年（1600）の関ヶ原の合戦により城は焼失するが、京坂を結ぶ交通の要所であるため、慶長 6 年（1601）に再建され、徳川氏の拠点として整備される。しかし、二条城の造営により元和 9 年（1623）には廃城となるが、城下町は江戸時代を通して京都・大坂を結ぶ水陸交通の要所、商業都市として栄える。

また、遺物保管の関係で一部分類できなかつた器種もあったが、筆者が実見し様相に変

わりないと判断し分析をおこなった。

① 16世紀末～17世紀前期

本時期の良好な資料として2区土坑 49 がある。産地別組成を比率の高い順に配列すると、土師質土器 77%、中国製磁器 6%、瀬戸美濃陶器 5%、信楽焼 3%、備前焼 2.5%、肥前陶器 2.3%、瓦質土器 2.2%、丹波焼 1.2%と続く(第22図)。用途別組成は食膳具 60%、調理具 35%、貯蔵具 3%、調度具 2%にわかれる(第23図)。

産地別組成で高い比率を示すのは土師質土器である。出土量が多いのは皿で、成形は手づくねとロクロがあり、これらの特徴から在地産と考えられる。皿には灯火芯を残すものもあるが、大半は食膳具で、その組成では 37.5%と高い比率を示す(第24図)。その他に羽釜があり、同時期の1区溝 1357 から焙烙も出土する。

中国製磁器は土師質土器に次いで高い比率である。主な器種は碗・皿・鉢などの食膳具で、食膳具組成において 23%を示し、これに続く瀬戸美濃陶器 22%とは近い数値で拮抗する数値である(第24図)。景德鎮窯の碗・皿が多いが、漳州窯の鉢も目立つ。瀬戸美濃陶器は食膳具の碗・皿・鉢が出土する。皿は無文で、見込みに目痕を残す量産品が多い。碗は天目碗が主で、鉢は志野焼、黄瀬戸など茶懐石に分類される高級品である。これら食膳具の品質は高級品2に対して、量産品3と高級品も一定量含まれる。

同じ施釉陶器・磁器である肥前陶器は、先の2産地と比べるとその比率は低い。主な器種は碗・皿で、品質は絵唐津などの高級品2に対して無文の量産品が3の割合で、高級品も一定量含まれる。

焼締陶器は信楽焼、備前焼が出土する。信楽焼は甕が出土し、貯蔵具組成では本産地のみである(第26図)。1区土坑 2120 から備前焼、常滑焼も出土するが、中心は信楽焼である。備前焼は鉢・播鉢が出土する。本遺構では播鉢は備前焼播鉢のみだが(第25図)、同時期の1区土坑 2120 からは信楽焼播鉢が出土し、2産地が拮抗していたと思われる。

本時期の伏見城跡の産地別組成は、土師質土器が高い比率でこれに肥前陶器を主とする施釉陶器・磁器が続く。用途別組成では施釉陶器・磁器の食膳具が主体である。これら諸点は明石城武家屋敷跡と共通する。また、品質も量産品が多いが中国製磁器や「桃山陶器」の懐石具や茶器などの高級品も一定量出土することも同じで、両遺跡は同一類型とみることができる。

しかし、土師質土器の数値が本遺跡では 50%以上を示している。その主器種が同様に皿であるが、明石城武家屋敷跡では 32%であった。用途別組成も先の遺跡では調度具、伏見

城跡は食膳具に分類されており、異なる。本遺跡の土師質土器の様相は都市型遺跡の京都や奈良町遺跡と共通し、中世からの受容形態が継承されていたと思われる。

また、焼締陶器の播鉢・甕は明石城武家屋敷跡では丹波焼で、信楽焼を主とする本遺跡とは異なるが、これら産地は両遺跡の近郊に位置する。したがって、両遺跡の焼締陶器は広域流通品を受容するのではなく、遺跡近郊の製品を主に受容するという点では共通する。

② 17世紀後期～18世紀前期

本時期の良好な資料として1区土坑1313がある。産地別組成は土師質土器42%、肥前磁器23%、信楽焼16%、肥前陶器15%、瀬戸美濃陶器3%、京焼系陶器0.4%、瓦質土器0.2%と続く(第22図)。用途別組成は食膳具63%、調理具25%、調度具8%、貯蔵具4%にわかれる(第23図)。

本時期においても産地別組成で高い比率を示すのは土師質土器だが、本遺構では皿の破損が著しいために数値が高く現れたが、個体数値は肥前磁器と近接する。主な器種は皿・焙烙・火鉢である。そのうちで焙烙は調理具組成で28%と高い比率を示す(第25図)。

土師質土器に続くのは肥前磁器で、先に述べた通り産地別組成において高い比率を示す。器種は食膳具の碗・皿・鉢、調度具の瓶類がみられる。この中で食膳具が多く、その組成で49.5%を示す(第24図)。施釉陶器・磁器の品質は、前代では明末清初の中国製磁器の青花や瀬戸美濃陶器の「桃山陶器」に分類される志野焼の懐石具であったが、本時期には有田町で生産された染付や色絵製品が主体となる。その一方で「くらわんか手」とよばれる量産品も出土するが、その割合は量産品3に対して、高級品2と前者が多い。

焼締陶器では信楽焼が多く出土する。主な器種は播鉢・甕・壺で、調理具組成をみると播鉢は信楽焼66%のみである(第25図)。同時期の1区土坑1372から丹波焼播鉢も出土するが僅かで、前代と変わらず播鉢の主産地は信楽焼である。甕は貯蔵具組成によると信楽焼が91%と多く、これに備前焼が9%と僅かに出土する(第26図)。したがって本遺跡の播鉢・甕の主産地は信楽焼であることが明らかとなる。

肥前陶器の主な器種は碗・皿・鉢などが主体で、瓶類も僅かに出土する。食膳具組成をみると、肥前磁器に次いで肥前陶器31%となり、施釉陶器の中では比率が高い(第24図)。出土量の多い碗の装飾は京焼風陶器・刷毛目・呉器手と多種である。

この他、京焼系陶器は本時期から出現するが、出土量はごく僅かである。器種は本遺構では鉢のみであったが、1区土坑746からは色絵碗も出土する。

本時期の伏見城跡の産地別組成は土師質土器が減少し、それに変わって肥前磁器が増加し主体となる。用途別組成では肥前磁器の増加により食膳具が前代よりさらに比率を上げる。これら諸点は明石城武家屋敷跡と共通する。また、陶磁器の品質では量産品が多いが高級品も一定量出土することや、焼締陶器も近郊の製品を主に受容することも同じで、したがって、本時期も両遺跡は同一類型とみることができる。

③ 18 世紀後期～19 世紀前期

本時期の資料として大型の廃棄土坑の 1 区土坑 783 がある。産地別組成を見てみると土師質土器 69%、肥前磁器 8%、軟質施釉陶器 8%、信楽焼 3.5%、堺・明石焼 2%、京焼系陶器 0.8%、瓦質土器 0.5%、備前焼 0.5%、肥前陶器 0.5%、瀬戸美濃陶器 0.2%と続く（第 22 図）。用途別組成は食膳具 26%、調理具 4%、貯蔵具 2%、調度具 68%にわかる（第 23 図）。

この時期でも産地別組成で土師質土器の比率は高いが、これは皿の破損が著しいためで個体数値では肥前磁器が 50%を示し、もっとも多く出土する。土師質土器の器種組成は前代と変わらず皿が圧倒的に高い比率であるが、焜炉は前代より急増しており、この中には涼炉などの嗜好品も含まれる。

肥前磁器は本時期でも産地別組成で高い比率を示し、施釉陶器・磁器の中心である。器種は碗・皿などの食膳具、瓶類や神仏具の調度具も出土する。食膳具組成をみると土師質土器 69%、肥前磁器 25%、京焼系陶器 2%、瀬戸美濃陶器 1.5%、肥前陶器 1%で（第 24 図）、土師質土器の比率が高いが、これは先に述べたように個体数値だと前代と変わりなく肥前磁器が主体と考えられる。

焼締陶器では堺・明石焼が出現するが、その量はごく僅かである。多く出土するのは信楽焼で、主な器種は播鉢・甕・壺・鉢である。播鉢は調理具組成では信楽焼 34%、堺・明石焼 34%、備前焼 14%と続き、先の 2 産地が拮抗する（第 25 図）。甕は貯蔵具組成で信楽焼に限られ、前代と変化はない（第 26 図）。

この他、京焼系陶器は本遺構では 1%未満であるが、同時期の 1 区土坑 754 では肥前磁器に次いで高い比率を示し、施釉陶器の主となる。この傾向は 18 世紀中期からみられ、土坑 1374 の産地別組成では肥前磁器 42%、土師質土器 29%、京焼系陶器 11%、信楽焼 8%、肥前陶器 5%と、施釉陶器の中で高い比率を示す。主な器種は食膳具で、その組成では肥前磁器 65%、京焼系陶器 16%、土師質土器 10%、肥前陶器 5%と前代より比率を

上げており、増加の要因が食膳具によることが明らかとなった。また、土坑 783 では食膳具に続いて煮沸具も高い比率を示すことから、18 世紀後期～19 世紀前期には新たに煮沸具が増加し、そのため京焼系陶器の比率が上昇したと思われる。

本時期の伏見城跡の産地別組成は京焼系陶器が急増し、肥前磁器と近接する。この京焼系陶器の増加は調理具の煮沸具によるもので、用途別組成において前代まで主体であった食膳具と拮抗する。また、焼締陶器は本時期でも近在する信楽焼を主に受容する。これら様相は明石城武家屋敷跡と共通することから、両遺跡を同一類型に属すると認められる。

また、本時期でも相違点はある。焼締陶器の播鉢の主産地が本遺跡では信楽焼と堺・明石焼が拮抗し、明石城武家屋敷跡は在地産の堺・明石焼で、本時期には近郊の窯以外の播鉢が受容され始める。この状況は、都市型遺跡でも近在に窯があっても堺・明石焼播鉢が流入しており、この状況は近畿全体の特徴と思われる。

3 堺環濠都市遺跡

① 17 世紀後期～18 世紀前期

本遺跡の 16 世紀末～17 世紀前期の土器・陶磁器様相は、I 都市型遺跡の特徴を呈していた。17 世紀後期以降は本類型に属すると考えられる。その様相を見てみると、17 世紀後期～18 世紀前期の良好な遺構として SKT959 の 136 土坑がある。産地別組成は土師質土器 54%、肥前磁器 23.3%、肥前陶器 10%、備前焼 3.7%、丹波焼 2.2%、瀬戸美濃陶器 1%、京焼系陶器 0.9%、軟質施釉陶器 0.8%、東南アジア陶器 0.8%、中国製磁器 0.8%、堺・明石焼 0.5%、中国製陶器 0.6%、信楽焼 0.4%と続く（第 43 図）。用途別組成は食膳具 40%、調理具 32%、貯蔵具 14%、調度具 14%と食膳具の比率が高い（第 44 図）。

前代と変わらず土師質土器は産地別組成で半数以上の比率を示す。しかし、本遺構では皿・甕の破損が激しいため高い比率であったが、個体数値では肥前磁器と共に 30%台を示す。器種は皿・焙烙・焼塩壺・甕・火鉢・焜炉・瓦灯・ミニチュア土製品・十能・土錘があり、出土量が多いのは皿・焙烙・甕である。また、胎土・成形方法から製品の多くは在地産と考えられる。皿はすべて手づくね成形で、灯火芯を残すものが 70%ある。皿は前代では食膳具としての使用が多かったが、136 土坑では灯火具へと受容目的が変わっている。皿に次いで出土量が多い甕は、貯蔵具組成をみると土師質土器 58%、肥前陶器 14.2%、丹波焼 8%、備前焼 7%、ベトナム陶器 7%、瓦質土器 1.8%と続き（第 47 図）、在地産の土師質土器甕が圧倒的に多いことがわかる。

陶磁器で高い比率を示すのは肥前磁器である。食膳具の碗・皿・小坏・猪口、調度具の神仏具・蓋物・瓶類・化粧具・文具など豊富な器種組成である。このなかで食膳具が多く、その組成では52%と比率が高い(第45図)。碗の器形は丸碗・半球碗・筒型碗などバリエーションがある。

陶磁器の品質は前期では景德鎮窯の食膳具や「桃山陶器」に分類される志野焼や絵唐津などの懐石具や茶器などの嗜好品が中心であったが、本時期では有田町で生産された柿右衛門様式などの色絵皿、染付の碗・皿などの肥前磁器の食膳具が高級品の主体となる。このような高級品が出土するが「くらわんか手」などの量産品も多くあり、その比率は高級品2.5に対して量産品が3と後者が多い。また、堺環濠都市遺跡における肥前磁器の出現時期は元和元年(1615)の大坂夏の陣以降と考えられている¹⁴。17世紀後期の状況をみるとSKT959の137土坑の産地別組成では、土師質土器58.5%、肥前磁器20%、備前焼7%、肥前陶器6.8%、瓦質土器2.6%、丹波焼2.5%、中国製磁器1.1%、東南アジア陶器0.8%、中国製陶器0.6%、瀬戸美濃陶器0.6%、軟質施釉陶器0.4%、朝鮮王朝陶磁器0.4%、東播系須恵器0.1%、堺・明石焼0.1%と続く(第43図)。土師質土器の数値が高い原因は甕の破損が激しいためであり、個体数値では肥前磁器と近接した数値を示す。肥前磁器の主な器種は食膳具で、その組成をみると肥前磁器41.5%、土師質土器37.5%、肥前陶器16.5%、中国製磁器3.4%、朝鮮王朝陶磁器1.1%と肥前磁器が主体であるが、品質は量産品が多い。この状況から、肥前磁器の増加傾向は17世紀後期には現れ、それが食膳具の急増によることが明らかとなる。

肥前陶器は17世紀前期より比率は下がるが、一定量出土する。器種は食膳具の碗・皿・鉢、調理具の播鉢、貯蔵具の甕、調度具の香炉・壺で、このうち食膳具が多い。食膳具組成では18%と低いが(第45図)、碗の装飾は刷毛目・三島手・呉器手・陶胎染付・京焼風陶器と多種にわたる。また、肥前陶器甕については、先に示した通り貯蔵具組成で土師質土器甕に次いで高い比率を示す(第47図)。本甕は堺環濠都市遺跡では17世紀前期から出土するが2%と僅かであった。17世紀後期とするSKT959の137土坑では8%出土しており、本遺構の状況から17世紀後期～18世紀前期に肥前陶器甕の出土量が増加することがわかった。

備前焼は焼締陶器のなかで比率は高いが、施釉陶器・磁器との比率値とは大差がある。

¹⁴赤松和佳「近畿地方(3)大阪府下出土の肥前陶磁について」『国内出土の肥前陶磁 西日本の流通をさぐる』九州近世陶磁学会 2002年

主な器種は播鉢・甕で、各状況は調理具組成で播鉢は備前焼 9%、丹波焼 5%、堺・明石焼 1.9%、瀬戸美濃陶器 0.3%、肥前陶器 0.3%と続く（第 46 図）。前代までは備前焼が主産地であったが、本遺構では産地数も増え、一産地が独占する状況ではない。甕は先に見たとおり、本遺構では土師質土器、肥前陶器が高い比率で、備前焼は丹波焼よりも低い比率で減少する。備前焼甕は 17 世紀前期までは主体であった。その後、17 世紀後期とする SKT959 の 137 土坑での甕の様相は、備前焼 42%、肥前陶器 7%、丹波焼 4%、瓦質土器 3%となり、産地は増えるが備前焼甕が依然として高い比率を示す。このことから、備前焼甕が減少するのは 17 世紀後期～18 世紀前期に土師質土器甕・肥前陶器甕の増加によることがわかった。

この他に、堺・明石焼、京焼系陶器が本時期から出現する。器種は堺・明石焼が播鉢、京焼系陶器は碗・銚子・土鍋であり、これらの出土量は僅かである。前代まで多く出土した中国製磁器や東南アジア陶器はこの時期には激減する。中国製磁器の主な器種は食膳具の碗・皿・鉢で、前代と変わらないが、清朝磁器などの最新器種はなく、16 世紀末～17 世紀前期の伝世品が出土する。東南アジア陶器はベトナム陶器の長胴甕で、これも伝世品と考えられる。

本時期の堺環濠都市遺跡では、前代に比べて土師質土器が減少し、17 世紀後期から増加する肥前磁器が産地別組成の主体となる。また、堺・明石焼や京焼系陶器などの新しい産地が本時期から出現するが、その出土量は僅かであった。さらに、前代では堺環濠都市遺跡の焼締陶器の主産地は備前焼であった。本時期には播鉢は備前焼、甕は在地産の土師質土器甕となり、遺跡近郊の製品を主に受容する傾向がみられる。このような諸点は、明石城武家屋敷跡と類似する。また、有田町で生産された高級品の割合は、明石城武家屋敷跡と比べるとやや少ない。

このように、明石城武家屋敷跡とは高級陶磁器の量比がやや少ないものの、産地別組成や新産地の出現期や肥前磁器の増加時期が共通するため、両遺跡を同類型とみることができると考えられる。

② 18 世紀中期～18 世紀後期

本時期の良好な遺構として堺環濠都市遺跡 SKT959 の 122 土坑がある。産地別組成を見てみると土師質土器 51%、肥前磁器 20.2%、肥前陶器 7%、信楽焼 5%、京焼系陶器 4.5%、瀬戸美濃陶器 4%、堺・明石焼 3%、瓦質土器 2%、備前焼 2%、中国製磁器 0.6%、

軟質施釉陶器 0.3%、産地不明陶器 0.3%、丹波焼 0.1%と続く（第 43 図）。用途別組成は食膳具 28%、調理具 33%、貯蔵具 26%、調度具 13%にわかれる（第 44 図）。

産地別組成で高い比率を示すのは土師質土器である。但し、これは焜炉・甕などの大型製品の破損が著しいためで、個体数では 20%を示し、次の肥前磁器と差異がない。主な器種は皿・火鉢・焜炉・甕で、なかでも火鉢や焜炉などの暖房具・厨房具の出土量が増加する。前代の 137 土坑では調度具組成で火鉢 22%、焜炉 5%の比率を示していたが、本遺構では火鉢 6%、焜炉 38%である（第 48 図）。火鉢は同時期の他の地点では 20%前後出土しており、本時期にはこれら器種が多く受容され始める。甕は貯蔵具組成で土師質土器 78%、信楽焼 17%、備前焼 3%、肥前陶器 1%と（第 47 図）、前代よりさらに比率を上げる。

肥前磁器はこの時期でも高い比率を示す。主な器種は食膳具の碗・皿で、その組成では肥前磁器 51.4%、肥前陶器 12.6%、京焼系陶器 11.4%と、前代より比率を上げている（第 45 図）。主体である碗・皿は有田町で生産された高級品 1 に対して量産品 3 であり、前代と変わらず主に量産品を受容していたと考えられる。食膳具以外に調度具の神仏具・化粧具などもあり、これらは前代より比率を上げる。

肥前磁器に続くのは肥前陶器で 18 世紀前期より出土量が減少する。前代では碗と甕が高い比率を示していた。本遺構の食膳具組成によると肥前磁器碗 35%、京焼系陶器碗 11%、肥前陶器碗 6.6%、瀬戸美濃陶器碗 5%と続き、肥前磁器碗や京焼系陶器碗より少ない（第 45 図）。甕も同様で、貯蔵具組成で 1%と僅かで（第 47 図）、これらの減少により肥前陶器の比率が下降したと考えられる。

信楽焼は前代より比率を上げる。主な器種は甕である。貯蔵具組成では土師質土器 78%に次いで信楽焼が 17%を示す。これら以外に備前焼 3%、肥前陶器 1%が出土するが、信楽焼とは大差があった。SKT959 では埋甕遺構から丹波焼甕も出土するが量は僅かである。したがって、陶器甕の主体は信楽焼甕に移行したと思われる。

京焼系陶器もまた前代より比率を上げる。主な器種は食膳具の碗で、この他に調理具の土鍋、調度具の香炉・蓋物がある。碗は先に述べた通り、肥前磁器碗に次いで高い比率であり、碗の増加により、産地別組成において京焼系陶器の数値が上がったと考えられる。器形は丸碗・端反碗・筒形碗と豊富で、装飾も色絵、錆絵、錆絵染付と多彩である。また、この時期から調理具の土鍋が出土するが 10%と低い。

その他に、瀬戸美濃陶器は香炉・灰落とし・水注・壺と調度具が多い。備前焼は 18 世

紀前期よりさらに比率を下げ、前代まで一定量出土した播鉢・甕は他産地に完全に移行する。堺・明石焼の器種は播鉢で、調理具組成では備前焼1%、堺・明石焼13%と、地元産の播鉢が主となる(第46図)。

本時期の堺環濠都市遺跡の産地別組成は肥前磁器の比率が高く、施釉陶器・磁器を主とする組成である。主体である肥前磁器の器種は前代と変わらず食膳具で、これは主に日用品として受容されている。また、京焼系陶器碗や土鍋なども本時期から増加し、さらに、播鉢も堺・明石焼が大量に流入している。甕の産地別組成も近郊の製品を主に受容していた。これらの様相は明石城武家屋敷跡と共通し、本時期も両遺跡をほぼ同一類型とみることができる。

4 その他の城下町型遺跡

近畿では明石城武家屋敷跡・伏見城跡以外に、近世を通じて本類型に属する遺跡が他にあり、ここではそれらを取り上げる。

① 16世紀末～17世紀前期

本時期の資料として兵庫県姫路市に所在する姫路城跡があり(第68図-5)、遺構としては城南小学校地点土坑3がある。

産地別組成をみると土師質土器62%、肥前陶器13%、備前焼9%、中国製磁器7%、瀬戸美濃陶器6%、丹波焼2%、信楽焼0.5%、軟質施釉陶器0.5%と続く(第75図)。用途別組成は食膳具83%、調理具12%、貯蔵具4%、調度具1%にわかれる(第76図)。

産地別組成で比率が高いのは土師質土器で、主な器種は皿・土釜である。本遺構では皿の破損が著しいため62%を示すが、個体数値では50%である。皿は成形方法や胎土の色調から在地産と思われ、用途は一部に灯火芯を残すものもあるが、多くは食膳具に属する。その組成を見てみると土師質土器70%、肥前陶器13.8%、中国製磁器10%、瀬戸美濃陶器8%と続き(第77図)、個体数値では肥前陶器50%、土師質土器45%と前者よりやや低い。

次に続くのは肥前陶器で、食膳具の碗・皿・鉢、調理具の播鉢・瓶類などが出土する。肥前陶器は食膳具組成で高い比率を示し、他の施釉陶器・磁器の数値より大きい値である。

次は中国製磁器である。器種は碗・皿などの食膳具で、その組成では肥前陶器に次いで比率が高い(第77図)。景德鎮窯の碗・皿で、鉢については漳州窯の製品が目立つ。瀬戸

美濃陶器は肥前陶器とは大きく比率値に違いがあるが、食膳具の碗・鉢が出土する。碗は天目碗、鉢は懐石具に分類される志野焼で、嗜好品が多い。施釉陶器は他に、軟質施釉陶器があり、器種は碗で、器形の特徴から日用器というより、茶器に分類できる。

このように施釉陶器・磁器は貿易磁器や「桃山陶器」に分類される懐石具などの高級品が出土する。量産品との割合は高級品2に対して、量産品が3と高級品も一定量含む。

焼締陶器で比率が高いのは備前焼である。器種は食膳具の鉢、調理具の挿鉢、貯蔵具の甕、調度具の鉢が出土する。主体は挿鉢・甕で、調理具組成で挿鉢は備前焼40%、肥前陶器5%、産地不明5%と続き、備前焼挿鉢が高い比率を示す(第78図)。甕も同様であり、貯蔵具組成をみると備前焼50%、丹波焼20%と、備前焼甕が多く出土する(第79図)。

姫路城跡の産地別組成は土師質土器が高い比率を示し、これに肥前陶器、中国製磁器などの施釉陶器・磁器が続く。用途別組成においては食膳具が多く、それを材質別にわけた場合、施釉陶器・磁器を中心とする。これらは明石城武家屋敷跡や伏見城跡と共通し、量産品が多いが高級品も一定量出土することも同じである。したがって、これら遺跡は同一類型に属するといえる。

姫路城跡では焼締陶器の主産地が備前焼であり他の遺跡と異なる。しかし、姫路城跡は備前焼の生産地に近接することから、明石城武家屋敷跡・伏見城跡の焼締陶器の状況と共通すると考えられる。

② 17世紀後期～18世紀前期

本時期の資料として、麻田藩陣屋跡の落込み46が挙げられる。麻田藩陣屋跡は、現在は豊中市蛸池の中町に所在する(第2図-4)。1万石の大名青木氏によって営まれた陣屋で、元和元年(1615)の大坂夏の陣以後、陣屋を設けたと考えられており、明治4年(1871)の廃藩置県による陣屋の移転までここで営まれる。

落込み46の産地別組成をみると、肥前磁器50%、京焼系陶器19%、土師質土器12%、肥前陶器12%、丹波焼4%、軟質施釉陶器1.6%、瓦質土器0.7%、備前焼0.7%と続く(第49図)。用途別組成は食膳具76%、調理具14%、調度具10%にわかれる(第50図)。

産地別組成で高い比率を示すのは肥前磁器である。器種は碗・皿・鉢・小坏・猪口などの食膳具、瓶類・文具などの調度具が出土する。このうち碗・皿が多く、食膳具組成では肥前磁器60%、京焼系陶器17%、肥前陶器15%、土師質土器8%と肥前磁器が高い比率を示す。品質は「くらわんか手」が70%と多いが、有田町で生産された高級品も20%出

土する。

また、肥前磁器は本遺構において高い比率を示したが、この様相は前代から現れている。17世紀後期の廃棄土坑である。土坑1267の産地別組成は、丹波焼44%、土師質土器19%、肥前磁器19%、京焼系陶器9%、肥前陶器6%、中国製磁器3%と続く(第49図)。肥前磁器は丹波焼に次ぐ比率であるが、これは丹波焼播鉢の破損が著しいためで、個体数では土師質土器と丹波焼、肥前磁器が近接する数値を示す。肥前磁器の主な器種は食膳具で、その組成をみると肥前磁器63%、京焼系陶器14.5%、土師質土器9%、肥前陶器9%、中国製磁器4.5%と高い比率を示す(第51図)。したがって、本遺跡では17世紀中期～17世紀後期にかけて肥前磁器が上昇したと思われる。

肥前磁器に続くのは京焼系陶器で、前代の土坑1267よりさらに比率が上がり、他の施陶磁器と差異がある。器種は食膳具の碗・鉢、調理具の土瓶・土鍋が出土する。碗・鉢ともに色絵製品が多く、碗は同じ施釉陶器である肥前陶器碗が7%に対して京焼系陶器碗17%と比率が高い(第51図)。また、本時期から土瓶・土鍋などの煮沸具が出現するが、量は少ない。

京焼系陶器の次に多いのは土師質土器で、主な器種は皿・焙烙・火鉢・焜炉である。このうち皿と焙烙が多い。皿は先に述べたとおり食膳具組成では施釉陶器・磁器より比率が低い。焙烙は調理具組成で35%と鍋類では高い比率を示す(第52図)。

肥前陶器は肥前磁器、京焼系陶器と比べると比率は低いが、食膳具の碗・皿・鉢が出土する。この中で鉢は食膳具組成をみると肥前陶器鉢8%に限られ、このことから施釉陶磁器鉢では本産地が主であったと思われる(第51図)。

焼締陶器は丹波焼のみで、器種は鉢・播鉢である。播鉢はこれが独占し、また、本遺構では出土しないが、同時期の井戸18では丹波焼甕が高い比率を示す。このことから、本遺跡の焼締陶器の主産地は丹波焼であることがわかった。

本時期の麻田藩陣屋跡の産地別組成は、肥前磁器が主体でこれに土師質土器・施釉陶器・磁器が続く。肥前磁器は17世紀後期から出土量が増え、これにより用途別組成で食膳具が高い比率を示す。これらの諸点は、明石城武家屋敷跡や伏見城跡と共通する。さらに、焼締陶器の主産地が近郊の産地であることも同様で、本時期の麻田藩陣屋跡は明石城武家屋敷跡や伏見城跡と同一類型とみることができる。

③ 18世紀後期～19世紀前期

本時期の資料として麻田藩陣屋跡の土坑 26 である。産地別組成を比率の高い順に配列すると肥前磁器 35%、京焼系陶器 26%、土師質土器 14%、丹波焼 6%、瀬戸美濃陶器 5%、肥前陶器 3.5%、堺・明石焼 3%、京焼系磁器 2.2%、軟質施釉陶器 2%、備前焼 1.3%、瀬戸美濃磁器 1%、信楽焼 0.5%、萩焼 0.25%、中国製磁器 0.25%で（第 49 図）、肥前磁器が前代に引き続き高い比率だが、次に続く京焼系陶器と差が縮まる。用途別組成は、食膳具 45%、調理具 32%、調度具 22%、貯蔵具 1%で、食膳具を主体とするが、調理具との比率差は僅かである（第 50 図）。

前代と変わらず比率が高いのは肥前磁器である。器種は食膳具の碗・皿・鉢・小坏・酒坏・猪口、調度具の神仏具・文具・段重・蓋物・瓶類と豊富な組成である。このうち多く出土するのは食膳具で、その組成をみると肥前磁器 58%、京焼系陶器 18%と続き、前代と同様に高い比率を示す（第 51 図）。碗はくらわんか手碗を主体とするが、半球碗・筒型碗・望料碗・広東碗・小丸碗と器形にバリエーションがある。また、小坏・酒坏・猪口などの坏類の数値も 18 世紀代より比率を上げる。また、同じ磁器である瀬戸美濃磁器、京焼系磁器もこの時期から出現する。瀬戸美濃磁器は碗のみで、比率も僅かで肥前磁器の比率に影響を及ぼさない。京焼系磁器は碗・皿・鉢・瓶が出土し、比率は肥前磁器と比べると低い、瀬戸磁器より器種は多い。

また、本遺跡では窯道具が大量に出土し、窯道具の中には青磁が溶着したものがあり、周辺で磁器生産をおこなっていたと思われる¹⁵。また、その窯道具の特徴、組成から京焼の技術的影響を少なからず受けた窯と考えられ、出土した京焼系磁器の中には本窯の製品が多く含む。

肥前磁器に続くのは京焼系陶器で、器種は 17 世紀後期～18 世紀前期より増え、食膳具の碗・鉢、調理具の土瓶・土鍋、調度具の灯火具・化粧具・文具・餌鉢・蓋物・瓶類と豊富な組成である。その中で碗・煮沸具・灯火具が多い。煮沸具は調理具組成では土瓶 36%、土鍋 33%と、これらで半数以上を占める（第 52 図）。したがって、これらの増加により京焼系陶器が産地別組成で肥前磁器と近接する数値となり、用途別組成においても調理具が上昇したと考えられる。

続く土師質土器は皿・焙烙・火鉢・涼炉・秉燭・ミニチュア土製品である。皿は調度具組成をみると 18 世紀後期より比率を下げる（第 54 図）。その一方で、火鉢・涼炉などの

¹⁵ 赤松和佳他『豊中市蛭池中町所在 麻田藩陣屋跡 —蛭池駅西地区第 1 市街地再開発工事に伴う埋蔵文化財調査報告書』（財）大阪府文化財センター2002年

暖房具、厨房具の比率は 18 世紀代より上がる。皿は、ロクロ成形と手づくね成形があり、手づくね成形が多い。

焼締陶器は丹波焼が高い比率を示す。器種は播鉢・徳利が出土し、新たに植木鉢や嗜好品もみられ始める。播鉢は前代まで主製品であったが、調理具組成をみると堺・明石焼 12%、丹波焼 2%と、堺・明石焼播鉢が多い（第 52 図）。この状況は 18 世紀後期からみられ、焼締陶器の主産地が本時期から丹波焼から堺・明石焼へ移行することが明らかとなった。徳利は調理具組成では丹波焼 8%、備前焼 2%と丹波焼徳利が主体である。これはいわゆる「貧乏徳利」と呼ばれるもので、それに対して備前焼徳利は「伊部手」と呼ばれる上質の製品であり、両産地では品質が異なる（第 52 図）。

丹波焼に続くのは瀬戸美濃陶器で、17・18 世紀代はほとんど出土しなかったが、本時期から僅かに増え始める。器種は碗・植木鉢・香炉・火鉢と調度具が中心である。前代まで一定量を保っていた肥前陶器はさらに比率を下げる。器種は鉢のみで京焼風、刷毛目、三島手と装飾は豊富であるが、前代までの組成とは大きく異なる。軟質施釉陶器は灯明皿・秉燭の灯火具が出土し、調度具組成では軟質施釉陶器皿 35%、京焼系陶器灯火具 2%、土師質土器皿 1%となり、灯火具は軟質施釉陶器が中心となる組成に変化する（第 54 図）。

この他、信楽焼は甕で貯蔵具組成をみると本産地のみである（第 53 図）。しかし、同時期の落込み 6 では丹波焼甕が出土し、18 世紀後期～19 世紀前期の本遺跡の甕は信楽焼と丹波焼が競合する。

本時期の麻田藩陣屋跡の産地別組成は、前代に引き続き肥前磁器が高い比率であるが、京焼系陶器が急増し、肥前磁器と拮抗する組成となる。京焼系陶器は煮沸具によりその比率を上げ、用途別組成においても食膳具と調理具が拮抗するようになる。この点も明石城武家屋敷跡や伏見城跡と共通し、したがって、本時期の麻田藩陣屋跡は先の遺跡と同類型に属するといえる。

5 小結

明石城武家屋敷跡を基準に伏見城跡・堺環濠都市遺跡・姫路城跡・麻田藩陣屋跡などから出土した土器・陶磁器の産地・用途別組成を比較検討した。

16 世紀末～17 世紀前期の産地別組成は、明石城武家屋敷跡、伏見城跡、姫路城跡では共通して、土師質土器が高い比率を示すが、主に肥前陶器をはじめとして食膳具の施釉陶器・磁器が多く出土し、その組成でこれらが主体となる。このことから 3 遺跡では本時期

に肥前陶器を中心とする施釉陶器・磁器の食膳具を日用器として受容していた。また、施釉陶器・磁器は量産品を主体とするが中国製磁器などの貿易磁器が10%前後を受容し、「桃山陶器」に分類される茶器や懐石具などの高級食膳具も一定量受容される。焼締陶器は3遺跡では近郊の産地を受容していた。しかし、同類型と考えられる大阪府岸和田市の岸和田城跡では、焼締陶器の主製品である挿鉢・甕は備前焼が各器種組成で70%を示している。このことから、近在に焼締陶器の産地がない場合は広域流通品を受容したと考えられる。

17世紀後期～18世紀前期に至ると、産地別組成は土師質土器が減少し、それに変わって17世紀後期から増加する肥前磁器が主体となる。さらに、本時期より京焼系陶器、堺・明石焼などが新たに加わり、産地数が増える。用途別組成は肥前磁器の増加により食膳具が前代よりさらに比率を上げ、日用器としての受容がさらに増す。また、陶磁器の品質は前代と変わりなく、本時期では「くらわんか手」などの肥前磁器の量産品が多いが、有田町で生産された色絵や染付の高級食膳具も一定量含まれる。焼締陶器の主産地は広域流通品ではなく、遺跡近郊の産地を主に受容し、流入形態が前代と変わる。

18世紀後期～19世紀前期では、京焼系陶器が急増し産地別組成で肥前磁器と近接した値まで上昇する。その要因は煮沸具の急増により、用途別組成において前代まで高い比率を示した食膳具と拮抗する組成となる。このように変化はあるものの、陶磁器の中心は肥前磁器の食膳具であることには変化はみられない。焼締陶器の主産地は窯場に近ければ近い程に前代の組成を継続するが、そうでなければ挿鉢は堺・明石焼に変化し、甕は多産地が競合しており、前代より流入形態が複雑化する。

以上がⅡ城下町型遺跡の土器・陶磁器の特徴である。その一方で、相違点もある。伏見城跡が同類型の遺跡と比べて土師質土器皿の出土量が多く、この様相はⅠ都市型遺跡の京都や奈良町遺跡でみられ、中世からの土器受容が本遺跡でも継承していたと考えられる。

このような相違点はあるが、ほぼ土器・陶磁器の様相が共通することから、これら遺跡を同類型とした。また、本類型に属する遺跡の性格が城下町跡が多いためⅡ城下町型遺跡と称す。

第3節 近畿の在郷町型遺跡における土器・陶磁器の様相

Ⅰ都市型・Ⅱ城下町型遺跡の特徴を述べたが、これらとは異なる一群がある。ここではそれら遺跡の土器・陶磁器の出土状況を検討し、その特徴を明らかにする。その代表例として伊丹郷町遺跡を基準とし、時期区分については都市型遺跡とほぼ同じであったため、

その画期に準じて検討する。

1 伊丹郷町遺跡（第1・68図-1）

本類型として、まず取り上げたいのは兵庫県伊丹市の南東部に位置する伊丹郷町遺跡である。江戸時代、酒造業により発展した在郷町である。これまで300数次を超える発掘調査が行われており、全国的にみてもこれだけ広範囲に町屋が調査された例は少なく、近世の町屋の様相を知る上で重要な資料を提供する遺跡の一つである。

① 16世紀末～17世紀前期

本時期の良好な資料として第51次調査B-2-1区SK479が挙げられる。遺構の性格は廃棄土坑である。産地別組成を比率の高い順に配列すると肥前陶器48%、丹波焼24%、土師質土器18%、備前焼5%、瀬戸美濃陶器5%と続く（第14図）。用途別組成は食膳具57%、調理具33%、貯蔵具5%、調度具5%と食膳具が高い比率を示す（第15図）。

産地別組成で高い比率を示すのは肥前陶器である。但し、本時期は、遺跡全体で遺物の出土量が少なく、遺構によって、その組成が異なる。第123次D-7区SK622では備前焼45%、丹波焼31%と焼締陶器が高い比率であるのに対して、第97次D-6区SP507は土師質土器34%、肥前陶器34%、丹波焼17%と土師質土器の比率が高い遺構もあり、本時期の産地別組成では土師質土器、焼締陶器、肥前陶器が拮抗すると考えられる。

本遺構での肥前陶器の主な器種は碗・皿・鉢などの食膳具で、その組成では肥前陶器80%、土師質土器10%、瀬戸美濃陶器10%と肥前陶器が中心である（第16図）。同時期の遺構である第123次D-7区SK622では肥前陶器40%、中国製磁器40%、瀬戸美濃陶器20%とあり、本時期の食膳具は肥前陶器が主体であることがわかる。品質については目痕を残す量産品が4に対して、絵唐津などの高級品1と、量産品が多い。

肥前陶器に続くのは丹波焼である。播鉢が出土し、調理具組成では本播鉢のみであるが（第17図）、先に取り上げたSK622では備前焼80%、丹波焼20%と備前焼播鉢が高い比率を示し、両産地が競合すると考えられる。備前焼は本遺構では甕のみであるが、SK622で播鉢も出土する。甕については同時期とするSP507では丹波焼甕が100%であり、遺構によってその比率が異なるものの、本遺構が示すように焼締陶器は丹波焼が主産地と考えられる。また、前代の有岡城時代では備前焼が多く出土することから、16世紀末～17世紀前期に焼締陶器の中心が丹波焼へ移行したと考えられる。

焼締陶器に次いで多いのは土師質土器である。器種は皿のみで、同時期の遺構では羽釜・

播鉢などが出土するが量は少ない。成形は手づくねで、その特徴から在地産と考えられる。

瀬戸美濃陶器は先に述べたように、出土量は少ない。主な器種は食膳具の碗・皿である。粗雑な作りの量産品のみで、「桃山陶器」に分類される志野焼や織部焼などの懐石具や茶器はみられない。また、本遺構では出土していないが同時期の SK622 では中国製磁器がみられる。産地別組成は 3% と比率が低い。このような例は、同時期の遺構でもあるものの、本遺構が示すように出土しない例が多い。

16 世紀末～17 世紀前期の伊丹郷町遺跡は、肥前陶器、丹波焼、土師質土器が産地別組成で拮抗する。用途別組成では食膳具が多く、これに貯蔵具・調理具が続く。また、調度具は低い比率で、器種は灯火具のみでバリエーションがない。陶磁器の品質は、中国製磁器や「桃山陶器」に分類される懐石具や茶器など的高级品は僅かで、量産品が主体である。

② 17 世紀後期～18 世紀前期

この時期の遺構として元禄 12 年（1699）もしくは元禄 15 年（1702）の火災に係る遺構が多数ある。第 123 次調査 D-7 区 SX01 は醸造遺構で埋土から被災した陶磁器が大量に出土した。

産地別組成を見てみると、土師質土器 37%、肥前磁器 32%、肥前陶器 11%、丹波焼 10%、備前焼 7%、軟質施釉陶器 2%、堺・明石焼 1%、瀬戸美濃陶器 1% と続く（第 14 図）。用途別組成は食膳具 38%、調理具 34%、貯蔵具 12%、調度具 3% にわかれる（第 15 図）。

産地別組成で高い比率を示すのは土師質土器である。それは焙烙の破損が著しいためであり、個体数で見ると肥前磁器 60%、土師質土器 20% と肥前磁器が中心となる。また、その影響は用途別組成の調理具の数値にも現れ、個体数では食膳具が 60% で、調理具は 20% 台に留まる。土師質土器の主な器種は皿・焙烙・火鉢などで、皿は手づくね成形で、灯火芯を残すものが多い。

肥前磁器は先に述べた通り、産地別組成の主体である。その出現時期は 17 世紀前期～17 世紀後期と考えられており、この時期とする第 86 次調査 B-12 区 SK66 の組成をみると土師質土器 67%、肥前陶器 20%、肥前磁器 9.9%、丹波焼 2%、瓦質土器 1%、中国製磁器 0.1% と続く。しかし、土師質土器焙烙の破損が激しいため数値が高く現れるだけで、個体数値では肥前陶器が 52% で、土師質土器は 20% を示し、肥前磁器は肥前陶器や土師質土器より比率は低く 4.5% であった。したがって、肥前磁器は 17 世紀後期～18 世紀前期に急増すると思われる。主な器種は食膳具の碗・皿で、その組成をみると本産地が半数

以上を示し（第 16 図）、この影響によって用途別組成で食膳具が高い比率を示すこととなる。さらに、食膳具以外に化粧具や瓶類などの調度具も出土するが、量は僅かである（第 19 図）。また、その品質は有田町で生産された高級食膳具が 1 に対して、「くらわんか手」などの量産品が 3 と、前代より量比はやや縮まるが、依然として量産品が多い。

肥前磁器に続くのは肥前陶器である。前代の第 86 次調査 B-12 区 SK66 の産地別組成では高い比率を示したが、本時期に至ると肥前磁器を下回る。しかし、肥前磁器以外の陶磁器とは比率に大差があることから、一定量は保持されている。主な器種は、京焼風陶器や呉器手などの碗類と刷毛目・三島手の鉢類で、この組成は前代と変わらない。

焼締陶器は備前焼と丹波焼が出土する。備前焼の器種は瓶類のみである。一方、丹波焼の器種は豊富であり調理具では播鉢（第 17 図）、貯蔵具では甕が丹波焼のみとなる（第 18 図）。

他に軟質施釉陶器は灯明皿が多く出土し、調度具組成をみると軟質施釉陶器灯明皿 9% に対して、土師質土器灯明皿 5% と比率が高いが（第 19 図）、同時期の第 97 次 B-13 区 SK26 では土師質土器灯明皿が中心である。新たに出現した産地として堺・明石焼があり、また、同時期の第 97 次 D-6 区 SK453 からは京焼系陶器も出土するが、これらの比率は僅かである。

また、同じ時期の火災資料である第 165 次調査焼土 1 は、伊丹郷町の北東に位置する万徳寺の敷地内に位置する。寺史によれば本寺は天正年間（1573～1591 年）の創建であり、現在の地には寛永 4 年（1627）に移ったとされている。江戸時代を通し三度の火災によって建物が焼失したことが明らかで、焼土 1 は検出状況から元禄 12 年（1699）か元禄 15 年（1702）のいずれかの火災にあたると思われる¹⁶。

産地別組成を比率の高い順に配列すると、肥前磁器 69.5%、土師質土器 13%、丹波焼 7%、中国製磁器 6%、肥前陶器 2%、備前焼 1.6%、京焼系陶器 0.8%、上野・高取焼 0.1% と続く（第 14 図）。用途別組成は食膳具 75%、調度具 13%、貯蔵具 7%、調理具 5% にわかれる（第 15 図）。

産地別組成で高い比率を示すのは肥前磁器である。主な器種は食膳具の碗・皿・鉢、調度具の神仏具、文具と豊富な器種組成である。このうち食膳具組成では 81% を示す（第 16 図）。品質は有田町で生産された柿右衛門様式の色絵や青磁色絵などの高級品 4 に対し

¹⁶ 伊丹市教育委員会『伊丹市埋蔵文化財調査報告書 - 震災復旧・復興事業に伴う発掘調査 - 』2001 年

て、「くらわんか手」などの量産品 1 と、高級品が圧倒的に多い。

土師質土器は皿・焙烙・焼塩壺が出土し、このうち焙烙は調理具組成で 40% と高い比率を示す (第 17 図)。焼締陶器で高い比率を示すのは丹波焼である。主な器種は播鉢・徳利・甕である。調理具組成では播鉢は本産地のみである (第 17 図)。甕も貯蔵具組成で 100% を示し (第 18 図)、播鉢・甕は丹波焼が主産地である。

他に、中国製磁器は食膳具の碗・皿・鉢などが出土する。その組成では肥前磁器とは比率値に大差があるが、本遺跡の同時期の遺構でこれほど出土する例はない。伝世品と考えられる龍泉窯の青磁碗や青花皿・鉢が組物でみられた。京焼系陶器は古清水の色絵碗が出土し、上野・高取焼は天目碗でこれも組物である。

17 世紀後期～18 世紀前期の伊丹郷町遺跡は、産地別組成では肥前磁器が主体で、土師質土器、肥前陶器が続く。16 世紀末～17 世紀前期に高い比率を示した焼締陶器は比率を下げる。焼締陶器は近在する丹波焼が播鉢・甕の市場を独占する。用途別組成は肥前磁器の増加により食膳具が上昇し、他の器種と大差がみられる。また、調度具は瓶類や神仏具など器種が増える。陶磁器の品質は、有田町で生産された高級品は僅かで、「くらわんか手」などの量産品を主とする一方で、有田町で生産された高級品を多く所持する万徳寺の例もある。

③ 18 世紀後期～19 世紀前期

この時期の良好な資料として第 51 次調査 B-2-2 区の廃棄土坑 SK722 が挙げられる。産地別組成を比率の高い順に配列すると肥前磁器 38%、京焼系陶器 29.8%、土師質土器 15%、丹波焼 11%、軟質施釉陶器 4%、堺・明石焼 2%、備前焼 0.07%、瀬戸美濃陶器 0.05%、肥前陶器 0.04%、瓦質土器 0.03%、萩焼 0.01% と京焼系陶器が肥前磁器と近接する (第 14 図)。用途別組成は調理具 34.6%、食膳具 34%、貯蔵具 9.4%、調度具 22% となり、食膳具の比率が下がり、調理具、調度具は比率を上げる (第 15 図)。

肥前磁器は前代と変わらず産地別組成で比率が高い。主な器種は食膳具の碗・皿である。その組成をみると、肥前磁器 79% に対して、京焼系陶器 17%、肥前陶器 1.8%、萩焼 0.2% と、他の産地とは比率値に大差がみられる (第 16 図)。品質は「くらわんか手」などの量産品 3 に対して、有田町で生産された高級品 2 と、量産品が多いが、前代より割合が縮む。碗の器形は広東碗・望料碗・半球碗・筒型碗と豊富になる。化粧具や文具などの調度具も前代より比率を上げる。

肥前磁器に続くのが京焼系陶器で、産地別組成では肥前磁器と近接する数値である。これは京焼系陶器の急須・土鍋など煮沸具の破損が著しいためで、個体数値では肥前磁器 37.1%、京焼系陶器 28%と数値に違いがある。京焼系陶器の出現時期は 17 世紀後期～18 世紀前期であった。その後、18 世紀中期には出土量が増えるが、依然として肥前磁器とは大差があり、京焼系陶器は本時期から急増したと思われる。主な器種は、食膳具の碗、調理具の土瓶・土鍋、調度具の灯火具・化粧具・餌鉢と豊富な組成である。このうち煮沸具が多く、調理具組成をみると京焼系陶器土瓶 41.7%、京焼系陶器土鍋 21%、土師質土器焙烙 10%、堺・明石焼播鉢 7.7%と（第 18 図）、前代まで調理具の主体であった焙烙は激減し、本産地の煮沸具を主とする組成へ変化する。また、これらの増加は用途別組成において調理具が上昇する要因となる。さらに、京焼系陶器は灯火具もこの時期から出現し、出土量も多量である。灯火具は調度具組成をみると京焼系陶器 16%、土師質土器 13%、軟質施釉陶器 10%であり、主体が前代の土師質土器灯火具から京焼系陶器灯火具へ移行する（第 19 図）。

土師質土器は 18 世紀代よりさらに比率を下げる。主な器種は皿・焙烙・火鉢・焜炉類で、18 世紀代まで中心であった焙烙は調理具組成で激減する。その一方で、火鉢や焜炉類は調度具組成で高い比率を示し、本時期の土師質土器の主な器種は暖房具・厨房具になる（第 19 図）。

焼締陶器は前代と変化なく丹波焼の比率が高い。但し、播鉢は調理具組成をみると堺・明石焼播鉢が多く出土する（第 17 図）。18 世紀中期とする第 123 次調査 D-7 区 SK102 の調理具組成では堺・明石焼播鉢 22%、丹波焼播鉢 18%と堺・明石焼に主体が移行しており、本時期にはさらに比率が上昇する。丹波焼は、甕が依然として多く、それ以外に鉢・徳利など豊富な器種が出土する。

この他に、瀬戸美濃陶器も出土量が若干ではあるが増える。これは 17 世紀代にみられた天目碗や皿などの食膳具ではなく、鉢や水鉢などの大型製品が出土し、前代とは様相が異なる。萩焼は新たに出現するが、数値が示すようにごく僅かである。

18 世紀後期～19 世紀前期の伊丹郷町遺跡は、産地別組成において京焼系陶器が急増し、肥前磁器と近接する比率を示す。それは用途別組成にも現れ、京焼系陶器の煮沸具の増加により調理具が食膳具と拮抗する。また、調度具も比率を上げ、器種もバリエーションが増え、前代までの肥前磁器の食膳具を中心に受容する様相から、食膳具を主とするもの他用途具も増え、本時期は陶磁器受容が変化する。

2 兵庫津遺跡（第 68 図－3）

伊丹郷町遺跡と類似する遺跡として、兵庫県神戸市兵庫区に所在する兵庫津遺跡がある。本遺跡は中の島地区を中心とした古代から近代にかけての複合遺跡である。古代には大輪田泊とよばれ、中世は日宋貿易の一中心港、近世以降は瀬戸内航路の重要な中継基地として現代神戸港の基礎を築いた、古代から近代を通して栄えた港湾都市である。

① 16 世紀末～17 世紀前期

本時期の資料として第 14 次地点の第 3・4 遺構面が挙げられる。産地別組成を比率の高い順に配列すると（第 69 図）、土師質土器 29%、肥前陶器 24%、備前焼 24%、丹波焼 11%、瀬戸美濃陶器 7%、中国製磁器 7.3%、瓦質土器 0.7%、東播系須恵器 2%と続く。用途別組成は食膳具 47%、貯蔵具 33%、調理具 16%、調度具 4%にわかれる（第 70 図）。

産地別組成で高い比率を示すのは土師質土器で、器種は皿・鍋・土釜・甕・火鉢・焜炉が出土する。また、本遺構では皿の破損が著しいため比率が高かったが、個体数値では土師質土器 26%、肥前陶器 25%、備前焼 25%と近接し、用途別組成においても食膳具と調理具に近い数値を示す。皿はロクロ成形と手づくね成形があり、法量もいくつかに分かれる。このうち法量の小さいタイプは口縁部に灯火芯を残すものが 60%と、灯火具に属するものが多い。鍋類は、焙烙は出土しておらず、中世からの継続する土釜タイプが主体である。

土師質土器に続くのは肥前陶器である。器種は食膳具の碗・皿、調理具の播鉢、貯蔵具の瓶類が出土する。このうち食膳具が多く、その組成をみると肥前陶器 58%、土師質土器 36%、中国製磁器 13.6%、瀬戸美濃陶器 8%と続き、中心であることがわかる（第 71 図）。品質は碗・皿ともに無文で、皿の見込みには胎土目や砂目などの目痕を残す量産品が 3 に対して、絵唐津の懐石具などの高級品が 1 であり、量産品が大半を占める。

次に焼締陶器が続き、このうちで高い比率を示すのは備前焼である。器種は調理具の播鉢、貯蔵具の甕・瓶類が出土する。調理具組成で播鉢をみると備前焼 24%、丹波焼 16%と、本産地が高い比率を示す（第 72 図）。甕は貯蔵具組成で備前焼 55%、丹波焼 26.5%、土師質土器 5%、東播系須恵器 1%と、備前焼と他産地とは比率値に大差がある（第 73 図）。これに続くのは丹波焼で、備前焼と器種組成は共通するが、先のとおり備前焼より高い比率を示す器種はない。

次いで中国製磁器の比率が高い。器種は食膳具の碗・皿が出土する。先の通り、肥前陶器、土師質土器と比べると中国製磁器は13.6%と低い(第71図)。また、同時期の遺構である第2次地点第3遺構面では5%と低く、他の遺構でも同じ様相を示す。製品は景德鎮窯が多いが、皿は漳州窯の製品が目立つ。瀬戸美濃陶器は食膳具の碗・皿で、同じ国産陶器である肥前陶器に比べると僅かである。懐石具や茶器に分類される志野焼や織部焼などの「桃山陶器」は含まれず、無文の量産品が多い。

また、これら施釉陶器・磁器は、先に述べた肥前陶器も含めて、主な器種は食膳具である。その組成をみるとこれら施釉陶器・磁器が77.6%となり、本時期の食膳具は施釉陶器磁器が主体であることがわかった。

本時期の兵庫津遺跡の産地別組成は、肥前陶器が土師質土器、焼締陶器と拮抗する。用途別組成は食膳具を主とし、そのうちわけで施釉陶磁器が多い。このような様相は伊丹郷町遺跡と共通する。また、品質は高級品がごく僅かで、量産品が多いことも同じである。さらに、焼締陶器も近在する産地を主に受容することも類似することなどから、両遺跡を同一類型に属すると考えられる。

② 17世紀後期～18世紀前期

この時期の良好な資料として第14地点第2遺構面があり、これは宝永5年(1708)に兵庫津全域を襲った大火災面と考えられる。

産地別組成をしてみると(第69図)、肥前磁器50%、土師質土器39.8%、丹波焼5%、肥前陶器4%、中国製磁器0.8%、備前焼0.6%、瀬戸美濃陶器0.2%、堺・明石焼0.1%と続く。用途別組成は(第70図)、食膳具64%、調理具28%、貯蔵具3%、調度具5%と食膳具が多い。

肥前磁器は産地別組成で比率が高い。器種は食膳具が多く、その組成をみると肥前磁器77%、肥前陶器14%、中国製磁器3%、土師質土器2%と、肥前磁器が主体である(第72図)。

兵庫津遺跡における肥前磁器の出現期は17世紀前期～17世紀中期と考えられ¹⁷、この時期の第2地点第3遺構面の産地別組成をみると土師質土器30%、肥前陶器36%、備前焼25%と続き、肥前磁器は4%と僅かである。したがって、17世紀後期～18世紀前期に

¹⁷ 藤本史子・赤松和佳他『兵庫津 - 御崎本町地点発掘調査報告書 - 』大手前大学史学研究所オープン・リサーチ・センター2006年

肥前磁器は急増すると思われる。この他に、調度具の神仏具・化粧具が出土する。また、前代では高級品とする中国製磁器がごく僅かに出土したが、本時期では有田町で生産された肥前磁器の色絵や染付の食膳具が出土している。もちろん量産品も多く出土し、その割合は「くらわんか手」などの量産品が3に対して、有田町で生産された高級品1と前代より量比が縮まる。しかし、同時期の資料である第38地点3面200-HOでは、高級品1に対して量産品4で、兵庫津遺跡内でも高級品に受容差があることがわかった。

土師質土器は前代より出土量が減る。器種は焙烙・甕・灯火具・焜炉が出土し、調度具と調理具が多い。このうち調度具組成をみると土師質土器灯火具 56%、土師質土器焜炉 15%、肥前磁器神仏具 14%、肥前磁器化粧具 14.5%とわかれ（第74図）、土師質土器が多い。この灯火具の主器種は皿である。

丹波焼は焼締陶器で高い比率を示す。調理具の播鉢・徳利、貯蔵具の甕が出土する。これらの器種は前代では備前焼より低い比率であった。本遺構の調理具組成では丹波焼播鉢 32%、備前焼播鉢 1%、堺・明石焼播鉢 1%と、丹波焼が高い比率を示す（第72図）。甕も同様で貯蔵具組成では丹波焼 60%、土師質土器 37%と高い比率を示す（第73図）。したがって、本時期における兵庫津遺跡の焼締陶器の主体は備前焼から丹波焼へ変わったことが明らかとなる。

他には、前代まで施釉陶器・磁器で比率が高かった肥前陶器は減少する。但し、肥前磁器以外の産地よりは数値が高いため、一定量あることがわかる。主な器種は前代と変わりなく食膳具である。

本時期から堺・明石焼が出現するが、出土量はごく僅かである。また、第38地点から京焼系陶器も出現するが、出土状況は堺・明石焼と類似する。

本時期の兵庫津遺跡は、産地別組成では肥前磁器が主体で、土師質土器、肥前陶器が続く。焼締陶器は丹波焼が独占していた。用途別組成は肥前磁器の増加により食膳具が上昇し、他の器種と比率値に大差がみられた。また、調度具は神仏具や化粧具など器種が増える。陶磁器の品質は高級品が僅かで、量産品を主とするが、有田町で生産された高級品を多く出土する例もあり、遺跡内で品質の受容差がみられるなど、これら様相は伊丹郷町遺跡と共通し、両遺跡を同一類型に属すると認められる。

③ 18世紀後期～19世紀前期

本時期の資料として第2地点第2遺構面が挙げられる。産地別組成を見てみると（第69

図)、肥前磁器 37%、土師質土器 27.8%、京焼系陶器 14%、肥前陶器 11%、堺・明石焼 6.7%、軟質施釉陶器 4%、瀬戸美濃陶器 1.8%、丹波焼 1%、備前焼 0.4%、瀬戸美濃磁器 0.2%、京焼系磁器 0.1%と続く。用途別組成は(第 70 図) 食膳具 70%、調理具 17%、調度具 10%、貯蔵具 3%にわかれる。

本時期でも肥前磁器の比率は高い。器種は食膳具の碗・皿・鉢、調度具の神仏具・化粧具と豊富な組成である。このうち食膳具組成では(第 71 図)、肥前磁器 70.7%、京焼系陶器 11%、土師質土器 6%、丹波焼 5%、瀬戸美濃磁器 2.7%、京焼系磁器 2%、肥前陶器 1.3%、中国製磁器 1.3%と、前代と変わらず肥前磁器がもっとも高い比率を示す。品質は「くらわんか手」などの量産品 3 に対して、有田町で生産された高級品 2 とその割合が縮まる。碗の器形は広東碗・望料碗・筒型碗・半球碗とバリエーションがみられる。

肥前磁器に続くのは土師質土器である。但し、本遺構では皿・焙烙など破損しやすい器種の数値が高く現れたが、個体数値では京焼系陶器より低い。器種は皿・焙烙・焜炉・火鉢・壺など調度具を主体とする。その組成をみると(第 74 図)、土師質土器灯火具 7%、土師質土器火鉢 11%、土師質土器焜炉類 46.2%、土師質土器壺 0.4%、土師質土器その他 1.2%、瓦質土器火鉢 1.2%、軟質施釉陶器灯火具 20%、京焼系陶器灯火具 7%、瀬戸美濃陶器神仏具 1%、肥前陶器神仏具 1%、肥前磁器神仏具 2%、肥前磁器化粧具 1.5%、肥前磁器文具 1.5%と、土師質土器が半数近い比率である。

土師質土器に続くのは京焼系陶器で、前代より比率が上昇する。器種は食膳具の碗、調理具の土瓶・土鍋・行平、調度具の灯火具と豊富な組成で、碗以外は本時期から出現する。特に煮沸具は多く出土し、調理具組成では土師質土器焙烙 62.7%、丹波焼播鉢 5%、堺・明石焼播鉢 14%、京焼系陶器土瓶・急須 6%、京焼系陶器土鍋・行平 12%と焙烙を主体とするなかで、播鉢と競合する組成を示し(第 72 図)、本時期に急増することがわかる。

焼締陶器は施釉陶器・磁器と比べると比率は低いが、堺・明石焼、丹波焼、備前焼がある。堺・明石焼は播鉢のみで、調理具組成では堺・明石焼 14%、丹波焼 5%と、堺・明石焼播鉢が高い比率を示す(第 72 図)。この状況は 18 世紀中期から現れ、本時期にはその比率差が増大することが明らかとなる。すなわち、本時期には播鉢の主産地が堺・明石焼に移行する。丹波焼は播鉢・徳利・甕・壺であり、このうち甕・壺が貯蔵具組成で 80%を示し、この様相は 18 世紀前期から継続している(第 73 図)。備前焼は徳利のみで、前代と同様に出土量は僅かである。

肥前陶器は食膳具の鉢、調度具の神仏具である。18 世紀代と比べると減少し、18 世紀

前期に多く出土した碗・皿は全く出土しておらず、鉢のみが出土する。鉢も口径が 15cm 以上の大型の鉢で、この法量は肥前陶器のみである。したがって、本時期には肥前陶器の主器種は大型の鉢へ移行する。

施釉陶器・磁器はこれら以外に、軟質施釉陶器は灯火具、瀬戸美濃陶器は碗・神仏具、瀬戸美濃磁器は碗、京焼系磁器は鉢・神仏具が出土する。このうち軟質施釉陶器の灯火具はこの時期から出現し、調度具組成をみると軟質施釉陶器灯火具 21%、京焼系陶器灯火具 8%、土師質土器灯火具 7%と半数以上の比率であり（第 74 図）、出現と同時に大量に用いられる。

本時期の兵庫津遺跡の産地別組成は、京焼系陶器が急増し、肥前磁器と近接する値を示す。それは用途別組成にも現れ、京焼系陶器の煮沸具の増加により調理具が食膳具と拮抗していた。これら様相は伊丹郷町遺跡と共通し、両遺跡を同一類型に属すると考えられる。

3 その他の在郷町型遺跡

伊丹郷町遺跡・兵庫津遺跡は近世を通して述べたが、他に同じ特徴を示す遺跡・遺構がある。ここでそれを検討する。

17 世紀後期～18 世紀前期の様相と共通する大阪府枚方市の枚方宿遺跡は、三矢町地区第 23 次調査において宝永 8 年（1711）の火災層を検出し（第 2 図 - 7）、ここからは 17 世紀後期～18 世紀初頭の大量の火災に遭った陶磁器が出土した。産地別組成を比率の高い順に配列すると、肥前磁器 78%、肥前陶器 16.7%、土師質土器 6%、備前焼 1%、中国製磁器 1%、丹波焼 0.7%、京焼系陶器 0.7%、信楽焼 0.4%、堺・明石焼 0.1%、瀬戸美濃陶器 0.4%と続く（第 61 図）。用途別組成は食膳具 75%、調理具 3%、貯蔵具 1%、調度具 20%にわかれる（第 62 図）。

肥前磁器が産地別組成で高い比率を示す。器種は食膳具の碗・皿・鉢・小坏、調度具の神仏具、化粧具と豊富な組成である。このうち食膳具が多く、その組成をみると肥前磁器 78%、肥前陶器 18%、土師質土器 2%、中国製磁器 1%、京焼系陶器 1%と、これが主体である。品質は有田町で生産された染付や赤絵などの高級食膳具 1 に対して、「くらわんか手」などの量産品 3 で、量産品が多い。

肥前磁器に続くのは肥前陶器で、主な器種は食膳具の碗・皿・鉢と調度具の神仏具である。土師質土器は皿と焙烙が出土し、このうち焙烙は調理具組成で 17%と高い比率を示す（第 64 図）。焼締陶器は備前焼の比率が高い。主な器種は播鉢と調度具の鉢である。この

うち播鉢は調理具組成で丹波焼 12%、備前焼 11%、信楽焼 8%、堺・明石焼 5%と（第 64 図）、丹波焼と備前焼の比率が拮抗するが、他の産地も一定量出土する。備前焼に続くのは丹波焼である。主な器種は播鉢と甕で、このうち甕は貯蔵具組成では丹波焼 65%、信楽焼 35%と（第 65 図）、これも多く出土する。このことから、播鉢・甕の主産地は丹波焼であることがわかった。

この他、中国製磁器は食膳具の皿・鉢、堺・明石焼は播鉢、京焼系陶器は食膳具の碗、調理具の煮沸具などが出土する。

また、本遺構から出土した土器・陶磁器は使用痕がないことから、これらの遺物は「瀬戸物屋」で販売された¹⁸商品と考えられ、そのため出土した製品は消費者のニーズに合うものを揃えていたと察しえる。したがって、17 世紀後期～18 世紀前期に肥前磁器の受容が高かったことがわかる。

枚方宿遺跡の土器・陶磁器は、産地別組成では肥前磁器が主体で、その他も施釉陶器・磁器が高い比率を示し、堺・明石焼、京焼系陶器などが新たに出現する。用途別組成は食膳具が圧倒的に高い比率で、他の器種と比率値に大差がみられる。陶磁器の品質は高級品が僅かで、量産品を主とするなど、これら様相は伊丹郷町遺跡の 17 世紀後期～18 世紀前期の様相と共通し、両遺跡を同一類型と属すると考えられる。

4 小結

伊丹郷町遺跡を基準として、兵庫津遺跡・枚方宿遺跡の土器・陶磁器の産地・用途別組成を検討した。これらの遺跡が同一類型であるとみた。在郷町型遺跡の特徴・相違点をまとめると、以下のようなになる。

16 世紀末～17 世紀前期の 2 遺跡の産地別組成は、共通して肥前陶器、土師質土器、焼締陶器が拮抗する。用途別組成もまた 2 遺跡ともに、食膳具を中心とし、これに貯蔵具、調理具が続く組成で、調度具のバリエーションは少なく灯火具のみであった。さらに 2 遺跡ともに品質は貿易陶磁器や志野焼・織部焼などの懐石具・茶器などの高級品はごく僅かで、肥前陶器の量産品が大半を占めていた。また、これら 2 遺跡以外に、同じ様相を示す遺跡として、八尾市の八尾寺内町遺跡、枚方市の枚方宿遺跡が挙げられる。

17 世紀後期～18 世紀前期に至ると、産地別組成では伊丹郷町遺跡、兵庫津遺跡、枚方

¹⁸ 下村節子「掘り出された茶碗屋 - 枚方宿遺跡 -」『中世末～近世の貿易陶磁器流通の諸問題』第 27 回日本貿易陶磁研究会資料 2006 年

宿遺跡ともに、前代で高い比率を示した焼締陶器は下降し、肥前磁器が急増し主体となるが、土師質土器、肥前陶器も一定量出土する。用途別組成も3遺跡ともに、肥前磁器の食膳具の急増により上昇し、本時期には他の器種との比率値に大差が認められる。そのうち調度具は神仏具や化粧具などが僅かに増え、器種にバリエーションがみられ始める。品質は、3遺跡ともに高級品は僅かで、量産品を主とする。このうち伊丹郷町遺跡や兵庫津遺跡では有田町で生産された高級品を多く所持する例もあり、遺跡内で高級陶磁器の受容差が本時期からみられ始める。

3遺跡の他に同じ様相を示す遺跡として、大阪狭山市の狭山藩陣屋跡、八尾市の八尾寺内町遺跡、大和郡山市の郡山城下町跡が挙げられる。

18世紀後期～19世紀前期に至ると、伊丹郷町遺跡、兵庫津遺跡では産地別組成では京焼系陶器が急増し、肥前磁器と拮抗する比率となる。その要因は煮沸具の急増によるもので、用途別組成において依然として食膳具が高い比率を示すが、調理具が近接する値まで上昇する。このように陶磁器受容に変化はあるものの、肥前磁器の食膳具を主体とする傾向には変わりはない。品質は量産品を中心とするが、高級品の割合が増える。

2遺跡の他に同じ様相を示す遺跡として、八尾市の八尾寺内町遺跡、大和郡山市の筒井城跡などが挙げられる。

焼締陶器の主産地は、16世紀末～17世紀前期では伊丹郷町遺跡・兵庫津遺跡は近接する産地を主に受容していた。しかし、同類型とみた八尾寺内町遺跡や枚方宿遺跡では備前焼が多く出土しており、近郊に窯場がない場合は広域流通品を受容したと考えられる。これが17世紀後期～18世紀前期に至ると広域流通品ではなく、丹波焼や信楽焼が分布圏を広げ、近郊の遺跡で多く受容される様相に変化する。さらに、18世紀後期～19世紀前期では窯場に近ければ近い程に前代の組成を継続するが、そうでなければ播鉢は堺・明石焼に、甕については多産地が競合し、前代より流入形態が複雑化する。

このように、近世における産地別組成や用途別組成の変化は上記の遺跡で概ね共通した様相を呈していた。したがって、これら遺跡を同一類型に属するとみなし、伊丹郷町遺跡の特徴と共通するためⅢ在郷町型遺跡と称す。

第4節 近畿の集落型遺跡における土器・陶磁器の様相

I都市型遺跡、II城下町型遺跡、Ⅲ在郷町型遺跡と異なる土器・陶磁器様相を示す一群がある。これらは17世紀後期以後に際立った特色をもつ遺跡が認められた。その代表例

として中百舌鳥遺跡を基準とし、時期区分についてはほぼ都市型遺跡と同じであったため、その画期に準じて検討する。

1 中百舌鳥遺跡

① 17世紀後期～18世紀前期

本遺跡は堺市中百舌鳥町に所在し（第2図-12）、古墳時代から江戸時代の遺構を検出する複合遺跡である。江戸時代は街中を通る西高野街道沿いに万代赤畑村・万代金口村・万代東村と呼ばれた集落が形成されたところである。これら集落は農業主体で米作の他に木綿栽培、粟・稗・大豆・蕎麦などが作られていた。本資料で取り上げるNAN15地点は江戸時代の開拓土豪屋敷として有名な筒井家住宅の屋敷地内に位置する。

本時期の良好な遺構としてSD002が挙げられる。産地別組成を比率の高い順に配列すると、肥前磁器57%、土師質土器17%、肥前陶器11%、堺・明石焼6%、瀬戸美濃陶器5%、備前焼3%、軟質施釉陶器1%と続く（第55図）。用途別組成は食膳具65%、調理具17%、調度具16%、貯蔵具2%にわかれる（第56図）。

産地別組成で高い比率を示すのは肥前磁器である。器種は食膳具が多く、その組成では肥前磁器が85%を示す（第57図）。そのうちで碗が77%と高い比率である。これらは「くらわんか手」などの量産品4に対して有田町で生産された高級品1で、圧倒的に量産品が多い。また、「くらわんか手」は初期のものではなく、18世紀前期以降に出現する製品が目立つ。食膳具以外には神仏具や瓶などの調度具が出土するが、その量は少ない。本遺跡の肥前磁器の出現時期は不明である。ただ、17世紀中期～後期にかけて各地で多く分布する腰張筒型碗が僅かに出土する。したがって、肥前磁器の増加は18世紀前期からと考えられる。

肥前磁器に続くのは土師質土器で、皿・羽釜・甕・灯火具・焜炉類・ミニチュア土製品と豊富な器種組成である。羽釜が多く、調理具組成で50%を示す（第55図）。また、皿は灯火芯を残すものが多い。

次に高い比率を示すのは肥前陶器で食膳具が出土し、その組成をみると13%と肥前磁器に比べると大差が認められるが、次の土師質土器よりは高い比率を示す（第57図）。主な器種は碗で、京焼風陶器・刷毛目・呉器手など豊かな装飾である。

また、本遺構では肥前磁器・肥前陶器などの施釉陶器・磁器は、産地別組成でも高い比率を示し、これらを合わせると68%を示す。主な器種は食膳具で、その組成において98%

を示す。したがって、本遺構は肥前磁器・肥前陶器の食膳具が主体に構成されていることがわかる。

焼締陶器で比率が高いのは堺・明石焼で、本時期から出現する。器種は播鉢で、調理具組成で独占する（第 58 図）。同じ材質である備前焼は徳利が出土する。同時期の遺構では調度具の鉢が出土するが、備前焼は総じて僅かである。

本遺跡における 17 世紀後期～18 世紀前期は、産地別組成において肥前磁器が主体で、これに土師質土器、肥前陶器が続く。用途別組成は食膳具を主体とし、調理具、貯蔵具が出土し、調度具はごく僅かであった。また、本時期から堺・明石焼が出現し、播鉢は本産地が独占する。

② 18 世紀後期～19 世紀前期

本時期の資料として中百舌鳥遺跡 S E 001 がある。産地別組成は肥前磁器 52%、土師質土器 19%、堺・明石焼 10%、瀬戸美濃陶器 6%、肥前陶器 5%、京焼系陶器 5%、丹波焼 1%、信楽焼 1%、軟質施釉陶器 1%と続く（第 55 図）。用途別組成は食膳具 62%、調理具 24%、調度具 12%、貯蔵具 2%と、調理具の比率が上がる（第 56 図）。

本時期においても肥前磁器が依然として比率が高い。主な器種は前代と変わりなく食膳具で、その組成をみると 77%と高い比率を示す（第 57 図）。碗のタイプは丸碗が多いが、望料碗、半球碗、筒型碗と前代より豊富となる。品質も有田町で生産された高級品 1 に対して「くらわんか手」などの量産品 3 と、前代よりその割合が縮まる。また、食膳具以外に神仏具や化粧具などの調度具の比率も前代より上昇する。

肥前磁器に続くのは土師質土器でこれも前代と変わらない。主な器種も焙烙・甕・灯火具・火鉢で、前代の様相を継続する。その中で火鉢は急増し、調度具組成で 36%と高い比率を示す（第 60 図）。

焼締陶器で比率が高いのは本時期でも堺・明石焼で、器種も変わりなく播鉢のみである。これに続くのは瀬戸美濃陶器で前代より比率が上がる。食膳具の碗、調理具の片口、調度具の火鉢が出土する。特に、食膳具は鎧碗、丸碗などの喫茶碗と考えられるものが多く、この影響により産地別組成での比率を上げる。

この他、肥前陶器は前代より比率を下げるが、食膳具を主体に出土する。その中で鉢については、本産地のみであり、これの受容により一定量を保持したと思われる。京焼系陶器は本時期から出現し、前代で施釉陶器の主体であった肥前陶器と近似する比率を示す。

主な器種は碗と鍋類であるが、出土量は少ない。丹波焼・信楽焼の主な器種は甕で、これらは貯蔵具組成では土師質土器 38%、丹波焼 31%、信楽焼甕 31%と拮抗する(第 59 図)。

本遺跡における 18 世紀後期～19 世紀前期は、前代に引き続き肥前磁器が産地別組成で中心であるが、堺・明石焼、瀬戸美濃陶器なども僅かではあるが比率を上げる。用途別組成も食膳具が依然として高い比率だが、調度具の比率も上がる。また、新たに京焼系陶器が出現するが、出土量は僅かである。

2 小結

中百舌鳥遺跡の土器・陶磁器の産地別組成・用途別組成を検討した。ここでは類似する遺跡も上げ、その様相をまとめる。

17 世紀後期～18 世紀前期は、産地別組成では肥前磁器が主体で、これに土師質土器、肥前陶器が続く。用途別組成は食膳具が多く、調度具はごく僅かで、その器種も灯火具が主体で、化粧具や文具などの嗜好品はごく僅かであった。本時期から堺・明石焼が出現し、播鉢は本産地が独占する。品質は高級品が少なく、量産品が主体である。このように、本時期では肥前磁器の食膳具が多く受容され、その他の器種は少なく、品質も量産品が主であった。中百舌鳥遺跡と同じ様相を示す遺跡として、兵庫県たつの市の馬立遺跡、大阪府阪南市の馬川遺跡と尾崎海岸遺跡などがある。

18 世紀後期～19 世紀前期では、産地別組成は前代と変わらず肥前磁器が中心であるが、堺・明石焼、瀬戸美濃陶器なども僅かに比率は上がる。用途別組成も食膳具の比率が依然として高いが、調度具も増え、灯火具以外に神仏具や瓶類などの器種がみられる。また、新たに京焼系陶器が出現するが、出土量は僅かである。このように、本時期には調度具が増えるものの、中心は前代と変わらず肥前磁器の食膳具である。中百舌鳥遺跡と同じ様相を示す遺跡として、兵庫県たつの市の馬立遺跡、大阪府八尾市の宮町遺跡・志紀遺跡などの集落跡がある。

本類型は中百舌鳥遺跡を基準とすることや、他の遺跡の性格が集落跡が多いため、これらをⅣ集落型遺跡と称す。

第 5 節 近畿における土器・陶磁器の様相

近畿のうち 41 の遺跡を分析した結果、Ⅰ都市型遺跡、Ⅱ城下町型遺跡、Ⅲ在郷町型遺跡、Ⅳ集落型遺跡の 4 類型に分類できた。本節では、これら遺跡の特徴を改めて比較検討

し、近世近畿の土器・陶磁器の様相を明らかにしたい。

16世紀末～17世紀前期にかけて近畿に分布するのはⅠ都市型遺跡、Ⅱ城下町型遺跡、Ⅲ在郷町型遺跡の3類型である。産地別組成は、量比が異なるものの土師質土器を主体とし、これに肥前陶器を中心とする施釉陶器・磁器が続き、焼締陶器の比率が低い点が概ね共通する。しかし、Ⅰ都市型遺跡、Ⅱ城下町型遺跡では施釉陶器・磁器の比率が50%以上を示すのに対して、Ⅲ在郷町型遺跡は50%未満で、さらに遺構によってその比率に変動がみられる。

3類型の用途別組成を見てみると、食膳具が高い比率を示し、これに調理具・貯蔵具・調度具が続くのも概ね共通する。食膳具の中心は肥前陶器を主とする施釉陶器・磁器で、Ⅰ都市型遺跡、Ⅱ城下町型遺跡、Ⅲ在郷町型遺跡ではこれらを日用器として受容したと考えられる。

施釉陶器・磁器のうち中国製磁器や朝鮮王朝陶磁器、東南アジア陶器などの貿易陶磁器の全体量に対する比率は、Ⅰ都市型遺跡では20～30%を示すが、Ⅱ城下町型遺跡10%台、Ⅲ在郷町型遺跡は5%未満であり、受容量が大きく異なることがわかった。また、Ⅰ都市型遺跡では地点の性格によって、瀬戸美濃陶器や肥前陶器などの「桃山陶器」に分類される懐石具や茶器、中国製磁器など的高级品が突出して高い比率を示す例が認められるが、他の類型ではそのような例は認められず、Ⅰ都市型遺跡と他2類型とは高級陶磁器に受容差があった。

焼締陶器は3類型とも、主製品は挿鉢・甕であった。産地は近郊に窯場がある場合はそれを主に受容し、なければ広域流通品である備前焼を受容する様相を示していた。

17世紀後期～18世紀前期になると、上記の3類型に新たにⅣ集落型遺跡が加わる。産地別組成を見てみると、肥前磁器が高い比率を示し、これに施釉陶器・磁器、土師質土器が続き、焼締陶器の比率が低い点は、Ⅰ都市型遺跡、Ⅱ城下町型遺跡、Ⅲ在郷町型遺跡、Ⅳ集落型遺跡とも共通する。肥前磁器の増加するのはⅠ都市型遺跡が17世紀中期～17世紀後期、Ⅱ城下町型遺跡では17世紀後期、Ⅲ在郷町型遺跡は17世紀後期～18世紀前期で、Ⅳ集落型遺跡はこれらより遅い18世紀前期に増加する。このことから、Ⅳ集落型遺跡は他の3類型より肥前磁器を日用器としての定着時期に差があったことがわかる。

また、京焼系陶器や堺・明石焼などの新産地の出現期はⅣ集落型遺跡以外の3類型では本時期には出現しており、したがって、Ⅰ都市型・Ⅱ城下町型・Ⅲ在郷町型遺跡の3遺跡とⅣ集落型遺跡では陶磁器受容に時期差が認められた。

本時期の高級品として貿易磁器以外に有田町で生産された高級磁器が出土するようになる。量産品との割合は、Ⅰ都市型遺跡では高級品2に対して量産品3、Ⅱ城下町型遺跡では高級品2に対して量産品3と同様になる。Ⅲ在郷町型遺跡では高級品1に対して量産品3で前代より割合が僅かに縮まる。Ⅳ集落型遺跡は高級品1に対して量産品4と先の3遺跡より高級品の割合がさらに少なく、本時期には高級陶磁器の各類型において量比に増減がみられた。

また、Ⅰ都市型遺跡、Ⅲ在郷町型遺跡では遺跡内で高級品の受容差がある。これらの類型では高級品の内容が大きく異なる。Ⅰ都市型遺跡では中国製磁器の清朝磁器や有田町で生産された肥前磁器の金欄手の最高級品が出土する。Ⅲ在郷町型遺跡からは有田町で生産された染付・色絵などの国産磁器が中心で品質に差異がある。後者の状況はむしろⅡ城下町型遺跡と共通することから、Ⅲ在郷町型遺跡内にⅡ城下町型遺跡の陶磁器様相を示す例が現れたとみることができる。

18世紀後期～19世紀前期の近畿では、Ⅰ都市型遺跡、Ⅱ城下町型遺跡、Ⅲ在郷町遺跡、Ⅳ集落型遺跡の産地別組成は前代と変わらず肥前磁器が高い比率を示し、土師質土器がさらに減少し、陶磁器主体となることは4類型とも類似する。用途別組成で食膳具・調理具が高い比率であることも同じで、食膳具組成で肥前磁器が50%以上を示すことも共通する。

しかし、京焼系陶器の受容が4類型で異なる。Ⅰ都市型遺跡では、産地別組成において京焼系陶器の煮沸具の増加により、前代まで中心であった肥前磁器を上回る比率となる。用途別組成においても調理具が食膳具より高い比率を示している。Ⅱ城下町型遺跡、Ⅲ在郷町型遺跡でもⅠ都市型遺跡のような大きな変化はないが、本時期に京焼系陶器の煮沸具が増加し、用途別組成において調理具が食膳具と近接した比率を示す様相に変化している。しかし、Ⅳ集落型遺跡では京焼系陶器の煮沸具が出土するが、このような変化はみられない。また、京焼系陶器の煮沸具と連動して増加すると考えられる土師質土器の焜炉・火鉢の出土量は僅かであった。

本時期ではⅠ都市型遺跡で突出して高い比率を示す地点もあるが、それを省くとⅠ都市型遺跡、Ⅱ城下町型遺跡、Ⅲ在郷町型遺跡で高級品の割合に大きな差はなくなるが、Ⅳ集落型遺跡では前代より割合は少なくなるが依然として差異はみられた。

以上、近畿の土器・陶磁器の産地別組成、用途別組成を比較検討し、土器・陶磁器の様相が4類型に分類できることがわかった。Ⅰ都市型遺跡は江戸時代を通して、器種の変化や新器種の出現については早く変化したが、他の類型とは17世紀後期～18世紀前期から

類似点がみられる。また、Ⅲ在郷町型遺跡は18世紀後期～19世紀前期にはⅡ城下町型遺跡と同じ様相へと変化し、Ⅰ都市型遺跡ともそれ以前より様相差がなくなる。しかし、Ⅳ集落型遺跡は一貫して他の3類型とは共通性が少ないことが明らかとなった。

